

2009 5



Architecture and Society

建築と社会

特集/体感するインテリア

日本建築協会

日本鋼建株式会社

代表取締役 伊藤 繁 和

〒530-0012 大阪市北区芝田2丁目8番7号 八木ビル5階

Tel : (06)6373-3043 Fax : (06)6373-3044

取扱品目 工 事……鉄骨工事, 耐震補強工事, 改修工事
材料販売……鋼材

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

<http://skk.jp>

空 気 と 水 の 環 境 創 造 企 業
三建設備工業

大阪支店 大阪市北区紅梅町3-5
TEL:06-6352-1131 (大代表)



人と空気と水の
環境創造。

求められる環境を、望まれたカタチにする。
三建設備工業は豊富な実績と確かなノウハウで
常に最適環境を創り出します。
空気と水、そして、人…この技術を「全て」のために。

名誉正会員の指名

本年3月25日に開催した総会において右記の方が、長年にわたる協会へのご功績により名誉正会員に指名をされました。

今後ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

東野 信義 氏
前 和歌山支部長

橋爪 節也氏講演会 「“大大阪”時代の モダン都市を 絵画・映像に読む」 と会員交流懇親会の 開催

来る6月17日（水）開催の日本建築協会通常総会終了後、総会出席者及び会員を対象に、右記のとおり講演会並びに会員交流懇親会を開催いたしますので、多数のご参加をお願いします。

平成21年度 通常総会開催

と き 2009年 6月17日（水）
16：00から
ところ 大阪マーチャンダイズ・
マートビル20階
東天紅
議 題 ①平成20年度事業報告
②平成20年度収支決算
③役員改選の件
総会の正式開催通知は、5月下旬頃に各会員あて、別途送付します。

■橋爪節也氏講演会「“大大阪”時代のモダン都市を絵画・映像に読む」
もしかして、昔の建築や風景の記憶は現在の都市にも形をかえて生きているのではないか、現在の風景・建物について、大阪の美術を専門とする橋爪節也氏が、大正・昭和初期の画家の描いた絵画から読み解く。小出楳重が好んだ中之島一帯の風景、池田遥邨が中之島から近代の浪花三大橋や大阪城を眺めて描いた日本画などに、いま氏は何を読み取ろうとしているのか。講演会では、大正・昭和初期に描かれた絵といまも面影をとどめる建物・風景とを、ビデオとトークをまじえて紹介していただきます。

と き 2009年 6月17日（水）
17：00～18：00
ところ 大阪マーチャンダイズ・マートビル20階「東天紅」
大阪市中央区大手前1-7-31
定 員 100人（参加費無料）

■会員交流懇親会

会員相互の情報交換、交流、親交を深めるため会員交流懇親会を開催。

と き 2009年 6月17日（水）
18：10～19：45
（講演会に引き続き開催）
ところ 東天紅（大阪マーチャンダイズ・マートビル 20階）
会 費 5000円（当日徴収）
事前にお支払いいただく場合は下記口座へ。
郵便振替口座 00910-9-39975
口座名義 社団法人日本建築協会

申 込 先 (社)日本建築協会総務課
下記のいずれかでお申し込み下さい。
TEL 06-6946-6981
FAX 06-6946-6984
Email soumu@aaj.or.jp
申込締切 6月12日（金）

■橋爪節也（はしづめ・せつや）氏プロフィール



●1958年大阪市生まれ。1984年東京藝術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了。1984年東京藝術大学美術学部芸術学科非常勤講師、東京藝術大学美術学部附属古美術研究施設助手を経て、1990年大阪市教育委員会事務局社会教育部文化財保護課学芸員・大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室主任学芸員、1998年大阪市教育委員会事務局社会教育部文化財保護課主任学芸員を歴任。2008年4月大阪大学総合学術博物館教授に就任。
専門は美術史。

●著書
単著に『モダン心斎橋コレクション—メトロポリスの時代と記憶』（国書刊行会、2005）。
編著に『モダン道頓堀探検—大正、昭和初期の大大阪を歩く』（創元社、2005）、『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像』（創元社、2007）。共著に『天神祭』（思文閣出版、2001）。『心斎橋研究』同人の中心メンバーとして『新築本撰（しんさいばしほんえらみ）』の刊行にも携わる。

講演会・懇親会FAX申込書（きりとり）

- 申込区分（○印をお願いします）
① 講演会のみ参加 ② 懇親会のみ参加 ③ 講演会・懇親会の両方参加
- 6月17日の通常総会出席予定（○印をお願いします）
① 出席予定 ② 欠席予定 ③ 未定
（総会開催通知は5月下旬頃に各会員あて別途送付いたします）
- 懇親会会費の事前振込（○印をお願いします）
① あり ② なし

申込者氏名	
ご連絡先	（職場・自宅）
ご連絡先TEL	

公告

出版委員会企画 第33回<プロのノウハウ>講座

『写真マンガでわかる 建築現場管理 100ポイント』

この講座は建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
(社)大阪府建築士会 (CPD 2単位)
(社)日本建築家協会 (CPD 2単位)



企画 (社)日本建築協会
著者 玉水新吾
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 四六判 224頁
定価 本体1,900円+税

日時 2009年 5月27日 (水)
18:00~20:00
会場 OMMビル2階 3号室
大阪市中央区大手前1-7-31
講師 玉水新吾氏
受講料 会員2,000円、一般2,500円、
学生1,000円
定員 40名 (先着順)
テキスト 『写真マンガでわかる 建築
現場管理100ポイント』
*当日特価1,800円 (税込)
(ご持参の方は購入不要)
申込 FAXまたはE-mailで、
①催し名『第33回プロのノウ
ハウ講座』
②氏名
③会員・一般の別
④受講票送付先
⑤連絡先電話番号
⑥CPDを申請される方は、
申請先の団体名
をお知らせください。
申込先 (社)日本建築協会編集事業課
TEL: 06-6946-6981
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoka@aaj.or.jp
URL: http://www.aaj.or.jp

建築デザインを志すひとびとは横文字
がお好き? しかし「ZD」「ISO」な
どには、あまり興味を示さなかった
……とはいいいすぎだろうか。
このたび、住宅建築の大ベテラン、玉
水さんが3冊目を出版された。
本のテーマは「ブローケンウインドウ
ズ理論」。はて、これは???と思わ
れる人も多いのでは。
建築現場管理の100ポイントすべて
「これは、大丈夫か?」との問いかけ
で始まる。
知っていても、やってくると期待し
ても、実行されなければ価値はない。
あたりまえのことをキチンと施工でき
てこそ「家創り」だろう。
品質、コスト、工程、安全、ひと、環
境の各分野で長年の経験をもとに「指
差し確認」を行っている。
写真マンガにより、悪い事例、良い事
例が対比され、実にわかりやすい本と
なっている。
住宅建設の現場から縁遠かった人、こ
れから家を建てたいと思っておられ
るかたにも、興味を持ってお読みいた
けると思う。
(出版委員会委員長: 上原正行)



玉水新吾
(たみみず しんご)

名古屋工業大学建築学科卒業後、1976年か
ら住宅会社にて、住宅現場の施工管理・品
質・保証・工程・安全衛生・環境・技術研
修教育・知的財産など30年住宅技術一筋。
資格: 一級建築士・一級建築施工管理技士・
一級土木施工管理技士・一級造園施
工管理技士・一級管工事施工管理技
士・インテリアプランナー・インテ
リアコーディネーター・コンクリート
技士・第1種衛生管理者・建築積算
士・宅地建物取引主任者等
講師: 木建作業主任者、足場作業主任者、職
長教育、事業主研修、RST講座・
SMT講座、安全大会、石綿特別教育、
各種技術研修、1級建築士学科講習
(施工)等
特許: 土台下パッキンおよびそれを含む建
物の換気装置、基礎型枠セパレーター、
換気水切り、減振装置、小屋裏換気
構造、隅木取付用墨付け治具等
著書: 「低層住宅施工現場のCIS」(PHP研
究所)「現場で学ぶ住まいの雨仕舞い」
「建築主が納得する住まいづくり」(学
芸出版社)

会告

総会議決お知らせ

平成21年3月25日開催の平成20年度第2回通常総会において、下記議案が原案どおり承認されましたので、報告し

ます。

1. 平成21年度事業計画
2. 平成21年度収支予算

3. 和歌山支部廃止の件
4. 名誉正会員推薦の件

1. 平成21年度事業計画

1. 平成20年度の事業概況

平成20年度の建設業界を取り巻く環境は、建築確認厳格化に伴う工事着工件数の減少後の回復が遅れるとともに、米国発の金融危機による景気の停滞があり、厳しい状況が続いた。

また、一方では改定建築士法、改定建設業法の施行があり、建築物に対する信頼確保のための法整備がなされた。

当協会の各事業においては、16年度の大幅改革をベースにして、それぞれの事業における肌理細かなコスト削減を行うなど、各事業の状況に応じた改善等を行った。個別の事業については、「建築と社会」の発行をはじめ、概ね前年度と同様の事業を実施した。

このようにして17年度以降財政の縮小均衡を図り、支出抑制に努めた結果、事業収支は18年度、19年度決算においても順調に推移してきた。20年度決算においては景気停滞の影響等で、会員口数、会員数の減少が引き続くこともあり、決算数値が前年度より低下する見込みである。

今後とも会員確保のための努力を継続していく必要がある。

2. 平成21年度の活動方針

各常設委員会の基幹事業は、40年、50年の実施年数を数え、会員の枠を超えてそれぞれの関係者に定着しており、その社会的役割も大きい。最近の建築基準法・建築士法改正等を踏まえ、建築に従事する者の資質の向上が求められる。

また、協会の将来のために若い技術者のニーズに即した新しい事業の掘り起こしが求められる。そのためには協会の枠（会員）のみにとどまらず、有為な人材の育成に努めることを活動の柱として、

- ・会員外の一般参加者が参加できる事業
 - ・他団体との交流・連携事業
 - ・若手・中堅技術者の参加を促す事業（例：コンペ・研修・講習）等
- の具体化を図る。

協会設立100周年を見据えて10年間にわたり展開する事業を行うために、平成19年度に編集委員会のサブ委員会として10年委員会を設置した。100周年を見据えて、今後約8年間にわたり、次のとおり100周年記念事業を展開する。

①10年委員会において、20年度から「学生向け建築現場見学会」を実施し、「大阪かくれたええところ再発見コンクール」を実施しつつある。

21年度以降も継続する。

②21年度から関西の建築家を紹介するページを会誌に設け、取材には若手会員の参画を得て100周年時に単行本「関西の建築界群像（仮称）」として発行する事業を進める。

③同様にして「再読 関西近代建築—モダンエイジの建築遺産」の発行事業を進める。

3. 平成21年度の活動計画

（1）出版委員会

「建築技術選書」と「プロのノウハウ」の企画・編集

当委員会は、建築技術の単行本発行を企画し出版することを目的として、時代のニーズに即した新しい著者の発掘を第一義的に行い、20年度で累計104冊の発行に達した。また、新たな出版にに合わせて、この出版書をテキストとする著者の講習会を実施した。

平成21年度においては、現在執筆中の図書を積極的に発行する。

（2）教育委員会

①建築工事実務講習会の実施

昭和32年以降、毎年主として中堅クラスの建築技術者を対象に標記講習会を実施。平成20年度で延べ84回を数えている。平成20年度は、本部・東海支部ともに1日コースで各1回実施をしたが、本部の参加者数は昨年並みで、収益性は横ばいとなった。

平成21年度は、平成20年度と同様に年1回実施する。

②工高生デザインコンクールの実施

工高生の設計技能向上のため、昭和30年に創設。平成20年度で第54回を数えた。平成20年度は参加校数26校、応募作品数98点と減少したが、経費の節減を図りつつ、21年度も20年度同様に実施する。

③工高建築科優秀卒業生の表彰

高等学校、専門学校の優秀な建築科卒業生を表彰することにより、本人の研鑽意欲の向上を促し、また激励することを目的とし、昭和27年より実施してきた。毎年約180校の申請があり、毎年申請する学校も多く重要度が高いので、平成21年度もこれまで同様実施する。

（3）事業委員会

情報見学小委員会

時代に即したテーマによる催しを年4回程度実施し、著名建築物や、茶室、近代建築等の見学会、並びに話題建築について、設計者・施工

者等より話を聞く場を設ける。平成20年度は、見学会は4回（うち1回は茶室見学会）開催。

平成21年度は、20年度同様4回程度開催とし、10年委員会と連携しつつ新しい企画への取り組みを行う。

（4）編集委員会

①会誌「建築と社会」の発行

会誌「建築と社会」は、大正6年の創立以来、当協会活動の中心にあり続け、会員相互あるいは会員と社会を結ぶ役割を果たしてきた。

記事内容の充実にも努めるとともに、「関西の建築界群像（仮称）」や「再読 関西近代建築—モダンエイジの建築遺産」等の連載企画を設立100周年に向けて進める。

②青年技術者の顕彰

満35歳以下の青年技術者を対象とする青年技術者顕彰制度は20年度で第55回に達し、建築界の優秀な人材を社会に顕彰してきたが、平成17年度からその意義をより一層深めるため、表彰式及び受賞者も出席しての懇親会を併せて実施している。

平成21年度も顕彰制度を実施するとともに、協会役員等や青年技術者同士の交流の場として、懇親会を実施する。

③読者と選ぶ「建築と社会」賞

平成11年度から、会誌に掲載された建築作品・論文・記事を社会性や環境への配慮を評価のポイントにして、読者投票をもとに選考して顕彰している。平成21年度も同様に実施する。

【10年委員会事業】

①建築現場見学会

次世代の建築界を担う人材の育成に繋がることを目的として、設計の意図を生かした建築現場やそれを支える施工者の工夫、また現代技術を駆使した工場での製作過程などさまざまな“ものづくり”の実際を総合的に体感できる場を、主として学生に提供する。

②大阪ええところそうせい（創生）プロジェクトの実施

大阪「かくれたええところ」再発見コンクールの開催

このプロジェクトは、普段見過ごされそうなまちの資源を発掘し、“こうしたらもっとよくなる”“もっといきいきする”等のアイデアを創立100周年の2017年までさまざまなテーマで募集することにより、まちづくりや町おこし、賑わいづくりに役立てていくことを目的としている。

会告

20年度はその第一弾として、大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールを実施しつつある。

21年度以降も継続して実施する。

(5) 建材委員会

新建築材料の調査・検討・紹介

新しい建築材料の品質・性能の検討、設計・施工上の留意点等の調査を行い、会誌上で紹介を行う。

平成21年度は、多角的な方法での建材の検討・調査、会誌上での紹介を行う。(社)日本建築

材料協会との連携にも留意する。

3. 和歌山支部廃止の件

平成21年3月末日をもって和歌山支部を廃止する。

理由：会員の減少が著しく、支部活動の継続が困難なため。

※和歌山支部会員は、引き続き本部会員として継続いただきます。

4. 名誉正会員推薦の件

内規第1条該当者 1名

会員歴30年以上、年齢満70歳以上の者で理事、監事、支部長及び評議員歴が3期以上の者（ただし、現にこの職に在任の者は除く）

東野信義氏 S.8.3.29生 75歳

S.44.8.1入会 会員年数 40年

H.12.6～H.20.6 和歌山支部長

2. 平成21年度収支予算書 —平成21年4月1日から平成22年3月31日まで—

単位：千円

科目	予算額	前年度 予算額	増減	備考	科目	予算額	前年度 予算額	増減	備考
I. 事業活動収支の部					II. 投資活動収支の部				
1. 事業活動収入					1. 投資活動収入				
①会費収入					投資活動収入計	0	0	0	
個人正会費	12,102	13,496	-1,394	・個人正会員：841名	2. 投資活動支出				
個人正会費(地方)	945	980	-35	・地方正会員：75名	①特定資産取得支出				
団体正会費	28,768	30,773	-2,005	・団体会員：1,151口	退職給付引当資産取得支出	595	191	405	事業所都合要支給額積立
準会費	19	17	2	・準会員：2名	記念事業積立預金支出	0	0	0	現状予定なし
会費収入計	41,834	45,265	-3,431		特定資産取得支出計	595	191	405	
②事業収入					投資活動支出計	595	191	405	
編集委員会収入	17,025	17,525	-500	会誌収入、10年委員会事業収入	投資活動収支差額	-595	-191	-405	
契約約款収入	4,072	4,072	0	契約約款販売収入	III. 財務活動収支の部				
出版委員会収入	500	500	0	出版企画料、講座参加料	1. 財務活動収入				
事業委員会収入	250	250	0	見学会、講演会参加料	財務活動収入計	0	0	0	
教育委員会収入	1,000	1,300	-300	実務講習会参加料	2. 財務活動支出				
建材委員会収入	0	0	0	会誌収入に含む(新建材広告料)	財務活動支出計	0	0	0	
雑収入	182	188	-6	80年史上、事業協力金	財務活動収支差額	0	0	0	
事業収入計	23,029	23,835	-806		IV. 予備費支出	50	150	-100	
③雑収入	170	177	-7	預金利息他	当期収支差額	1	1,724	-1,723	
事業活動収入計	65,032	69,277	-4,244		前期繰越収支差額	47,826	46,102	1,724	
2. 事業活動支出					次期繰越収支差額	47,827	47,826	1	
①事業費支出									
事業関係人件費支出	15,221	15,696	-475	3.5名					
編集委員会事業費支出	17,525	18,025	-500	会誌発行費、10年委員会事業費					
契約約款費支出	2,718	2,718	0	販売用約款購入費、送料					
出版委員会事業費支出	130	100	30	講座経費、印税支払経費、委員会事業費					
事業委員会事業費支出	220	200	20	見学会、講演会経費、委員会事業費					
教育委員会事業費支出	1,200	1,500	-300	工高生コンベ、講習会経費、委員会事業費					
建材委員会事業費支出	0	0	0	会誌発行費に含む					
雑支出	130	30	100	“西説関西近代建築”、“関西の建築界群像”調査費含む					
事業費支出計	37,144	38,269	-1,125						
②管理費支出									
管理関係人件費支出	13,246	13,621	-375	1.5名+派遣社員1名					
退職給付支出	0	0	0	現状予定なし					
福利厚生費支出	40	50	-10	職員福利厚生費					
助成費支出	1,859	2,300	-441	3支部への助成金、交付金					
会議費支出	1,026	1,172	-146	総会、評議員会、理事会、常設・特別委員会					

(注) 平成21年度については、借入限度額を30,000,000円とする。

今年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります!

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成21年9月号

「第56回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに55回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

56回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積み重ねている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1. 応募される人は満35歳（平成21年7月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教員である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあつて、なしたげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要の資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）
5. 「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第56回青年技術者特集号」（平成21年9月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

平成18年度から、青年技術者の公募は早めています。第56回青年技術者は、本年6月30日(火)までに応募できるよう準備をお願いします。

6. 提出資料

■すいせん用紙

請求は、すいせん依頼先担当部署、または本会事務局へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めてA3判用紙5枚以内にまとめる。

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料
- ④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。

7. 提出期限 平成21年6月30日（火）

8. 提出先 日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャндаイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
Email: ken-sha@aaj.or.jp

9. 青年技術者選考委員会（平成21年度）

委員長 設楽 貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委員 木多 道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
北村 潤／東畑建築事務所理事設計部長
長谷川 隆一／竹中工務店プロジェクト開発推進本部(西日本)本部長
吉田 文男／一般建築士事務所アトリエフォルム代表取締役
太田 寛／鴻池組大阪本店建築設計部長
桑原 進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
伊藤 昌明／日建設計設備設計部門設計長
井村 隆／清水建設関西事業本部設備設計部グループ長
宇城 英彦／大成建設関西支店建築部品管理室長
劔吉 敬／大林組本店建築生産技術部長

第1回

大阪「かくれたええところ」
再発見コンクール入
賞者決定

社団法人日本建築協会は2017年に創立100周年を迎える。その記念事業のひとつとして、「大阪「ええところ」そうせい（創生）プロジェクト第1弾」として、「大阪「かくれたええところ」再発見コンクール」を行った。4月15日OMMビルにて橋爪紳也氏（大阪府立大学特別教授、大阪府立大学観光産業戦略研究所長、建築史家）によって厳正な審査が行われ、応募総数216点のなかから最優秀賞1点、入選7点が選ばれた。

*入賞作品は日本建築協会ホームページで閲覧できます。



入賞作品の展示は、平成21年6月10日（水）～6月13日（土）10:00～17:00（最終日16:00まで）に2009会場社日本建築協会ブース（インテックス大阪3号館）にて。



大阪「かくれたええところ」再発見コンクール入賞者一覧

結果	氏名	題名	名称	応募対象所在地
最優秀賞	東井(あずまい)嘉信	未来のスパイラル・ジャングル	船町緑地	大阪市大正区船町1丁目
入選	大谷 くりこ	砂利道のある街角		大阪市阿倍野区阪南4丁目11番辺り
入選	早川 壽雄	駐車場になったお風呂屋さん	駐車場	大阪市阿倍野区阪南町1-17
入選	加藤 祐策	水上住居出現!?	桃ヶ池公園	大阪市阿倍野区桃ヶ池1丁目
入選	山本 勝彦	石畳階段と防空壕	北大江公園北側の石畳階段と防空壕跡	大阪市中央区石町1丁目3
入選	吉永 健一	西谷町アパート：戦後の都市不燃化の試みの名残	西谷町アパート	大阪市中央区谷町9丁目4-7
入選	吉田 進一	再生を待つ 赤レンガ倉庫	旧住友倉庫	大阪市港区海岸通2-6
入選	中原 文雄	西道頓堀モダニズム	湊町ビル	大阪市西区南堀江1

学生のための「建築
現場見学会」参加者
募集「(仮称) 堂島1丁目プ
ロジェクトホテル棟」

※申し込みはFAXかメールで

大学や専門学校の授業で行われる現場見学の多くは、一般に、建築の完成後あるいは完成間際に行なわれていますが、施工途上の見学の例は少なく、現場本来の生き生きとした躍動感や、建築を多人数の力で作り上げていく達成感を伝えるまでには至っていません。そこで、社団法人日本建築協会では、建築を学ぶ学生のために進行中の建築現場を紹介し、見学の機会を提供するべく「建築現場見学会」を実施いたします。

見学現場 (仮称) 堂島1丁目プロジェクトホテル棟
(商業施設、多目的ホール、
ホテルの複合施設)
大阪市北区堂島1-50-1

施工状況 躯体工事
設計 (株)日建設計
施工 (株)竹中工務店
日時 2009年7月3日(金)
13:30～16:30
定員 35名(申込みはゼミ単位)
締切日 2009年6月19日(金)
参加費 1名500円
問合せ 社団法人日本建築協会
(片山)
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
e-mail:kyoukai@aaj.or.jp

〔申込書〕

名称	(仮称) 堂島1丁目プロジェクトホテル棟
学校名・学部・学科	
引率者職名・氏名	(おられない場合は記入不要)
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
学生氏名・学年	
参加通知書送付先住所・TEL・FAX	〒 TEL FAX



設計・監理 ■

大林組名古屋支店一級建築士事務所

施工 ■

大林組名古屋支店

桜通M I Dビル

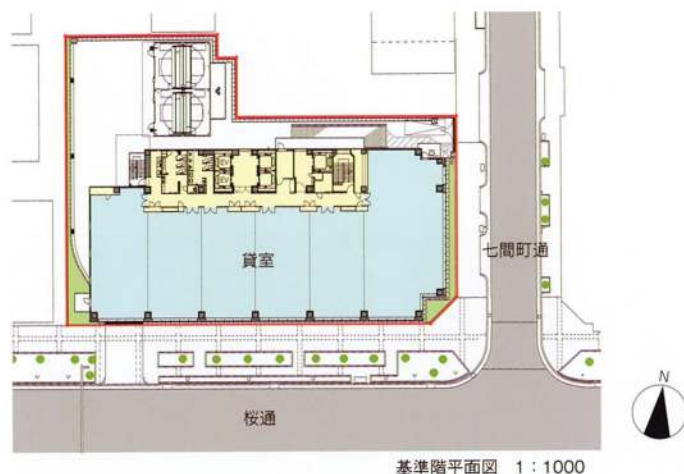
建物は、名古屋市中心部を東西につなぐ主要道路である桜通に面している。1階を店舗対応、2階より上を事務室対応としたテナントビルである。

これからの時代を勝ち抜く「高い機能性」と、既存ビル群に埋没しない「上質な存在感」をテーマに設計を行った。

事務室は奥行き約15mの無柱空間とし、基本モジュールは3.6m、天井高さは2.8mを確保した。600角グリッド天井システムや各階に増設用の室外機バルコニーを設けるなど、ユーザーの間仕切り変更や空調増強への要望にフレキシブルに対応できるように配慮した。各階に喫煙・リフレッシュルームを設け、トイレ内にはパウダーコーナー、フイティングボード、歯磨き専用ボウルを設置するなど、昨今のオフィスに求められる充実した共用空間も実現している。地震時の安全性に対しては、コア内2ヵ所に制震ブレースを設置して、耐震性の向上を図っている。

外観上層部は、スリムなラウンド付きマリオンと、2色のガラスを使い分けた上昇感のあるデザインとし、日射による陰影や、空の映り込みによってさまざまな表情の生まれるファサードを目指した。低層部は、建物の基壇部として花こう岩の柱型をリズムよく並べ、歩行者にビルの存在感をアピールする端正で上品なデザインを目指した。

(浅野英治／大林組)



所在地	愛知県名古屋市中区丸の内3-23-20
敷地面積	1,663.09㎡
建築面積	1,192.16㎡
延床面積	14,875.17㎡
構造規模	S造、13F
工期	2007年12月～2009年2月
最寄駅	名古屋市営地下鉄桜通線・鶴舞線「丸の内」駅 名古屋市営地下鉄桜通線・名城線「久屋大通」駅
撮影	吉見政秀／セゾン



gallery

風景を創る……

シスメックス テクノパーク

LANDESCAPE DESIGN 神戸里山の庭

LANDESCAPE DESIGN

三谷 景一郎 Keiichirou Mitani

科学技術は優れた文化背景の中で育まれ進歩して来た。そのため、研究開発を行う上で、研究者・技術者に最良の環境を提供するため、テクノパーク72,000㎡の敷地の約6割を緑地としたランドスケープデザインを行い、ランドスケープ内に研究者・技術者のコミュニケーションの場、発想の転換の仕掛けのための瞑想の部屋、等を敷地内に点在配置させた。また、敷地の一角には、研究施設を訪れる国内外のお客様をもてなし、交流を深めることを目的とした神戸里山の庭（日本庭園・茶室）を設けた。ここは、単なる親睦の場だけでなく、文化性を高め、文化と科学の融合から新しい発想が生まれる場となることを期待している。

三谷 景一郎

1957年 兵庫県生まれ

大阪芸術大学環境計画学科卒

現在 株式会社対馬造園店

緑のアトリエ設計室 室長

日本造園修景協会 上級修景士

日本造園学会会員

企画編集：鞆野淳司(作品作風小委員会)



特集

体感するインテリア

空間やインテリアを設計する際、設計者は利用者（あるいは自分に置き換えて）の受け止め方と反応を必ず想定する。まずは機能、人間工学的寸法に関連する事項があげられ、さらに知覚等による“体感＝感じ方”があげられる。“感じ方”に焦点を当てて空間を論じた場合、ともすれば取り留めのなさに結びつきかねないが、一方で空間の本質に直結すること多いように思われる。すなわち、“感じ方”は人それぞれの経験値と密接であり一般論になりにくい、時と場合により“隠れたツボ”に発展する。

今回の特集では、このような“空間の体感”にスポットを当て、インテリアに関連する要素を切り口に、おのおのの第一人者が、感じ方と空間の関連について語る。

インテリア・住宅系分科会幹事●神谷浩司

■総論Ⅰ

空間体験を設計する●大野隆造

■各論Ⅰ

照明の感じ方～佐川美術館 樂吉左衛門館における光の作法～●吉野弘恵

椅子の感じ方～身体感覚のデザイン～●矢田部英正

水の感じ方～水を用いた空間、バーデハウス～●松田光司

食空間の感じ方～総合的な食環境の構築～●木村ふみ

花の感じ方～フラワーデザインと空間論～●頼末麻起子

■各論Ⅱ

空間に対する感じ方の定量化～空間の明るさ感指標による照明設計～●岩井 彌

■総論Ⅱ

原理を生み出す空間設計●服部滋樹

本号特集企画担当・インテリア・住宅系分科会

阿部泰浩／加藤 力／神谷浩司／黒柳 亮／田中浩介／戸井賢一郎／ペリー史子／間瀬一博／本山 仁

空間体験を設計する

東京工業大学大学院教授
工学博士

大野隆造

1976年東京工業大学大学院建築学専攻修士課程修了、1980年ウィスコンシン大学大学院建築学専攻修士課程修了、1982年東京工業大学大学院建築学専攻博士課程修了。
東京工業大学工学部助手を経て、1986～1992年に神戸大学助教授、1995年東京工業大学大学院総合理工学研究科教授。
専門分野は環境心理学、建築計画学。

■はじめに

建築を学び始めて最初に教わるのは、建築は、床・壁・天井をつくることではなく、それによって包まれる空間を創造する行為だということである。私は、さらにもう一歩進めて、建築設計はそこを訪れる人の空間体験を設計することだと考えている。したがって、人が空間をどう知覚し、認知し、評価し、行動するのか、またその体験がどのように記憶され、想起されるのかを考えて設計すべきだと思う。そのためには、人間と環境をつなぐ心理的な相互作用を理解する必要がある。

ここでは、環境心理学の研究によって蓄積された環境の知覚・認知・評価・記憶・想起についての知見のいくつかを紹介したい。

■環境知覚における五感の働き

人間は他の動物に比べて高度に発達した視覚を持つため、視覚に特別な地位を与えてしまい、デザインと言えども視覚的な面だけが注目されてしまう。しかし実際の知覚世界は、言うまでもなく五感のアンサンブルとして成り立っている。

五感を大別すると、図1に示すように知覚対象に直接触れるのか、離れたところの対象を知覚できるのかによって分かれる。前者には触覚と味覚があり、いずれも知覚対象の物理的・化学的刺激に直接感覚器が接して情報を受け取っている。一方、後者は対象に直接接触しなくても知覚できる感覚で、嗅覚、聴覚、視覚がある。これらの感覚器官では、離れた対象（遠刺激）をいったん近刺激に置き換えて情報を受け取るメカニズムを持っている。嗅覚では鼻孔にある嗅細胞で、聴覚では耳の鼓膜で、視覚では眼の網膜で近刺激とな

る。触覚や味覚は人類の進化の過程で最も初期に発達した原始的な感覚である。一方、遠刺激から情報が得られる嗅覚、聴覚、視覚は陸上の広い空間を動き回るようになってから高度に発達した感覚である。

広がりのある建築空間の知覚を考えると、この嗅覚、聴覚、視覚が重要になる。そこで、ここではこの3種の感覚について、それぞれ取り扱う情報の内容と受け取り方（注意の指向性）について考えてみる。

まず、嗅覚は空気の質を無意識のうちに常にチェックしている。これは嗅細胞が呼吸する空気の通り道にセンサーとして置かれているからである。嗅覚は特定の対象に対して注意を払うことなく周囲の環境から常に情報を受け取っている最も原始的な感覚であり、得られる情報の意味するところは曖昧ではあるが、「何か変だ」と環境の異変を察知したり、その場所の雰囲気感を直感的に把握したり、また情緒的な反応を即座に引き起こす。卑近な例として、部屋のガス漏れをその匂いによって気付くことがあげられる。実際、都市ガスは本来無臭であるが、この嗅覚の警報装置としての役割を利用するため、あの嫌な匂いが付けられているのである。

これに対して視覚は、人間の場合は顔が向けられた前方しか見えず、さらに注視した対象近辺の狭い範囲からのみ詳細な情報が受け取れる。同じ哺乳類でもウマなどは両眼が顔の側面に付いているので視野が大変広い。人間の場合は、前しか見えない代わりに、一つの対象を両眼で見られるので視差による立体視が可能であり、より詳細な情報が得られる。そして注意を向けた対象について、それが何であるか、といった知的な判断をもたらす。嗅覚が原始的で情緒的であるのに対して、進化の最後の段階で急速に発達した視覚は、知的な感覚と言える。

聴覚は、注意の指向性の強弱と知的か情緒的かという観点において、ちょうど視覚と嗅覚の中間的な性質を持つ。聴覚的な情報は、特定の対象（音源）に注意を向けなくても得られるが、また一方で注意を向けた対象の音はより大きく明瞭に聞こえる（これを「カクテルパーティ現象」という）。つまり、注意を向けた会話相手から言葉を聞き取る知的な

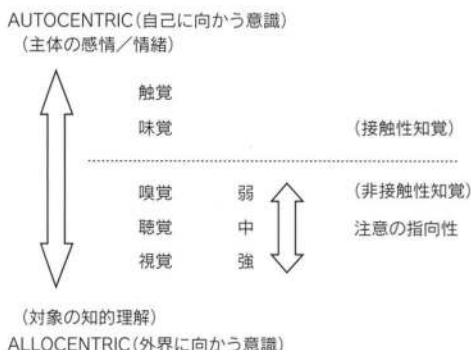


図1 環境知覚における五感の役割の違い

面があると同時に、どこからか流れてくるBGMを楽しむ情緒的な面があり、また注意を特に払っていないくても後ろから迫る自動車の警告音に反応することができるのである。

嗅覚や聴覚によって周囲環境の何らかの異常に気付いたら、視野は限られているが、より詳細な情報が得られる視覚を活性化させ、その原因をちょうどサーチライトで照らすように捜させるのである。このように、3種の感覚が互いにそれぞれの弱点を補い合って膨大な環境からの情報を処理して円滑な行動を可能としているのである¹⁾。人間の視覚系は解剖学的に見て、たしかに他の感覚系に比べて非常に発達した情報処理能力を有するが、日常生活において常に優位であるとは限らない。どの感覚器官による環境情報が重要であるかは、その時々の人間の欲求や必要性、あるいは人を取り巻く環境状況などによって刻々変化するからである。

■長期記憶のトリガー（引き金）：嗅覚

近年の認知科学の分野では、記憶のすべてが人の脳に貯蔵されているとは考えられていない。人間を取り巻く環境内の事物が、ちょうどパソコンの外部記憶装置のような役割を果たしていると考えている。すなわち脳は身体や環境から孤立したシステムではなく、身体や環境との情報のやり取りを通してはじめて機能する認知システムと考えられているのである。

嗅覚は、この環境の助けを借りた記憶に大変重要な働きをしている。それは、ある場所の特定の匂いが記憶要因となり、しかもその記憶は非常に長く保持されるという働きである²⁾。全く忘れていた昔の空間体験の記憶が、匂いが引き金になってかなり鮮明に思い起こされるのである。



写真1 民家の土間

この匂いの長期記憶で興味深いのは、匂いそのもの、つまりどんな匂いかといった内容が記憶されるのではなく、その匂いがある状況や場所の記憶を呼び起こす働きをする点である。写真1は、中に入ると土や煙のかすかな匂いが感じられる民家の土間である。ここで育った人がそこに帰って来たとすると、その場所での遠い過去の出来事について、生き生きと思い出すことができるだろう。

■視覚の2つの系統：焦点視と環境視

視覚について、上では他の感覚との比較で、注意の指向性が強く、知的な感覚であると述べた。しかし近年、人間の視覚系は、注視した部分から得られる情報とは別に、周辺を含む広い視野からも情報を得ており、それが眼から脳に別の神経経路を通して伝達されることがわかってきた。つまり、図2のように、従来の「何かを見る」という視覚の特徴とは異なる、無意識のうちに周囲から視覚的情報を「浴びる」といった形態があることがわかってきたのである。

表1はその2つの視覚の相違点を整理したものである。ひとつは、「焦点視」と呼ばれ、注視した対象物を注意深く吟味して、見ている主体にとっての意味を判断する知的な働き

をする以前から知られている視覚である。もうひとつは、「環境視」と呼ばれ、広い環境の状況を即座に把握して、自身の姿勢を保ったり空間を移動したりするために必要な情報をもたらす視覚である。この環境視は、前に述べた嗅覚や聴覚と同様に知的というより情緒的な反応をもたらすと同時に、一種の警報装置としても働き、場所の雰囲気の変化を察知して、より鮮明な焦点視を活性化させてその原因を探索させるといった具合に、両者の働きが相互に協力して環境からの膨大な視覚情報を効率よく処理している³⁾。

環境視の知覚過程は無意識あるいは受動的であるため、これまであまり注目されなかったし、また視覚実験もし難いため研究も進んでいなかった。しかし、それによって捉えられる空間の総体的な質こそ、環境デザインにおいて重要な側面である。

■空間の手触り：テクスチャー

テクスチャーは上述の環境視によって捉えられる表面の視覚的特徴のひとつである。ザラザラしたとか、スベスベした、といった表面の特徴を示すテクスチャーは過去の触覚経験が視覚化したもの（写真2）で、そういった表面の特徴を見るだけで、それが包む空間

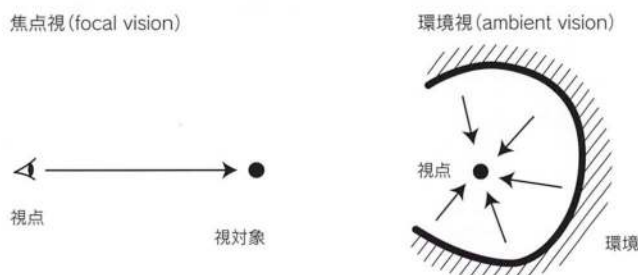


図2 焦点視と環境視の概念図

表1 視覚情報受容の2形態

	焦点視覚	環境視覚
心理的構え	集中的注意／意識的／能動的	拡散的注意／無意識的／受動的
視覚情報の伝達経路	視皮質	上丘
情報の処理形態	時間のかかる処理 (逐次的・直列的) 一部分から詳細な情報選択による 情報圧縮 (狭い視野)	瞬時の処理 (同時的・並列的) 広い範囲から薄い情報 統合による情報圧縮 (広い視野)
結果とその機能	対象の検出、認知 対象の知的理解	身体の直立・移動 注意の喚起、誘導 全体的印象の把握 情緒的評価
情報源（物理的環境）	環境内に散在する物体	連続的な広がりのある視覚的表面



写真2 触らなくてもわかる柔らかさ



図3 装飾の多いヴィクトリア調の応接間
文献4) より



図4 インターナショナル・スタイルの居間
文献4) より

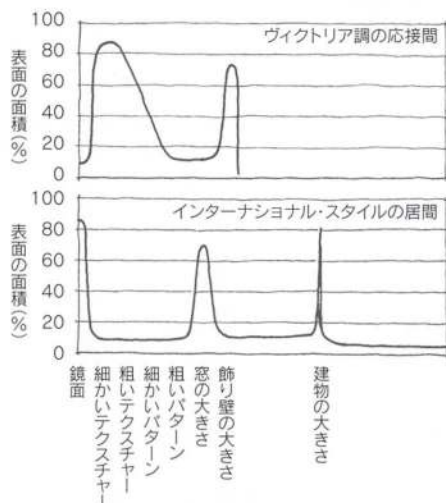


図5 ヴィクトリア調の応接間とインターナショナル・スタイルの居間のスケール・スペクトル
文献4) より

の直観的な印象や情緒的な味わいが体験される。

このテクスチャーの違いによる室内の雰囲気の違いを定量的に表現しようとしたのが、W.カーティスのスケール・スペクトルである⁴⁾。図3に示す装飾の非常に多いヴィクトリア調の応接間のファジーで温かな空間と、図4のすっきりとした冷たいインターナショナル・スタイルの居間との違いを、そこにある様々な要素の大きさと量の違いで示したのが図5である。横軸に室内にある要素の大きさ、縦軸にそれが占める面積(密度)を取り、連続する曲線で空間の質をプロフィールとして表している。前者の空間が様々なテクスチャーやパターンの壁や家具装飾で連続的なスペクトルとして示されるのに対して、後者が平滑な表面の壁と限られた無装飾の家具で不連続なスペクトルになっている。このように、人が受け取る空間の印象を、そこにある個々の要素を取り出して議論するのではなく、それらの視覚的なエネルギー・スペクトルとして捉えているところが興味深い。感じる側のユーザーはこんなことを分析する必要はないが、つくる側としては知っていたい事柄である。

認知と評価の個人差

環境心理学の研究成果のひとつは、環境デ

ザインの専門家と環境のユーザーとの間に大きなギャップがあることを指摘したことである。その原因のひとつは、デザイナーがデザインを美的な自己表現と考えてユーザーを顧みない場合である。そんなにひどくなくて、善意のデザイナーの場合であっても、往々にして実際のユーザーの要求を誤解して、使用者に関する仮説が誤ってしまうこともある。さらに、様々なユーザーが居ることも理解する必要がある。いわゆる環境に対する見方の違いや評価の個人差の問題である。この問題に対して、P.シールは図6に示すように、個人ごとに異なる環境からの情報の受け取り方の違いを、フィルターによって説明している⁴⁾。

シールは、(1) 生理的特性 (2) 情報選択特性 (3) 心理的構えの3段階のフィルターを想定したモデルを示している。「生理的特性」は、年齢などによって異なる身体の高さや感覚器官の感度などであり、子供や老人、ハンディキャップなど環境に対する身体的な能力の差異によるものである。「情報選択特性」は教育程度、知識、職業のほか文化、ライフスタイルや環境に対する見方や好み(都市志向か田園志向かなど)の違いによるものなどである。専門家とユーザーの違いを生み出すのは、このフィルターの違いである。そして最後の「心理的構え」はその時点

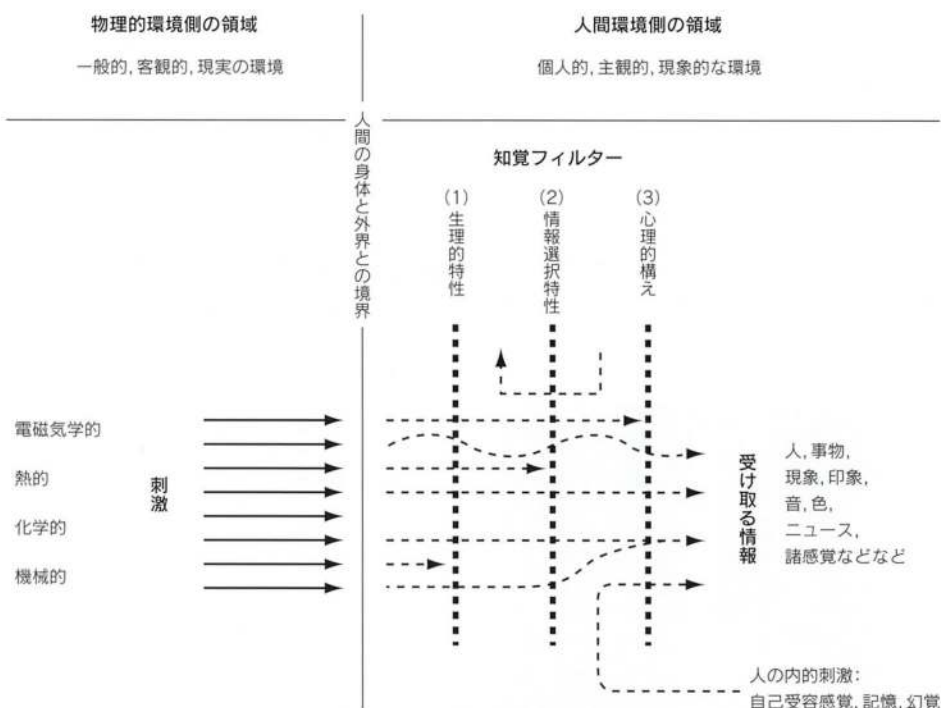


図6 シールの知覚フィルター・モデル

での欲求状況や覚醒状態によって異なるとしている。たとえば、家のない人にはどんな家でも良く見えるが、家を持つとより安全な家を求め、さらに快適な家、立派に見える家へと欲求が階層の上位に進み、家に対する見方も変化する。環境デザイナーは、個人的で断片的な経験から「子供とはこういうものだ」、「老人は・・・」といった紋切り型の先入観による過ちに陥らないために、ユーザーの特性に関する研究的知見を十分参照する必要がある。

■環境のあり方が行動を導く：

アフォーダンス

この聞きなれない「アフォーダンス」という用語は、心理学者ギブソンによる造語である。それは、「環境やその中の事物が動物の特定の行動を可能にするために備えている特性である⁵⁾」。物理的には同一であっても、生物の環境としての意味はそれぞれ異なる。アメーバの環境、蟻の環境、小鳥の環境は、人間の環境と同じではない。たとえば、垂直な壁を蟻は歩けるが人間には無理だし、人が歩ける地面は魚などの水生動物には無理である。つまりそれぞれ移動することを可能にするアフォーダンスが異なるのである。

このように、ある環境が備えているアフォーダンスは動物の種類によって異なるが、また同種であっても個体の能力によって異なる。たとえばドアのノブは、それを握って回す操作でドアを開ける働きをするが、その行為を可能とするアフォーダンスは、手で握れる大きさであること、またあまり表面が滑らないことである。ノブの形状もいろいろあるので、それによってドアを開けるために必要な行動が異なってくる。写真3のように、丸い握り玉は、回して開けるのに一定の握力が

いるが、レバーハンドルは握力が弱くても開けられ、高齢者や子どもにとってこちらの方が優しいことがわかる。それだけでなく、火災などの非常時に、火傷をして手が使えなくなった場合には手でなく肘でも開けることができ、回して開けるという行為に対するアフォーダンスが異なると言える。

われわれは物の形状によってそのアフォーダンスを読み取って行動している。いろいろ試さなくても、形状によって可能な使い方がわかる。つまり形状が行動を誘導してくれるのである。それで、形状が示唆するアフォーダンスがわかりにくいと戸惑うことになる。たとえば、海外に旅して飛び込んだトイレで、用を済ませて水を流そうとしたとき、何をどうすれば良いのかわからなくて困ることがある。見慣れない金具に、押すのか、引くのか、回すのか、金具の形状がどの行為も可能に見える場合は戸惑ってしまう。ブリュッセルでお世話になったトイレのフラッシュ(写真4)は、押すことしかできないし、その大小が水量を連想させてくれたので、一瞬戸惑ったがすぐに理解できた。

これからのグローバル化社会では、文化の違いを越えて、誰もが自然に扱い方がわかるようにアフォーダンスを示してくれる、まさにユニバーサルなデザインが求められている。



写真4 ブリュッセルのトイレ



写真3 ドアノブのアフォーダンス

■おわりに

お酒の良否を鑑定することを「聞き酒」と言うのが面白い。実際に感じることができるのは酒の色、香り、味、舌触りであり、五感のうち視覚、嗅覚、味覚、触覚を通してなのに、もうひとつ残された聴覚で酒を「聞く」と言う。これは酒の鑑定では4つの感覚のうちどれが前面に出て強調されても駄目で、全体が調和して一体となった評価をすべきであるということから、あえて直接感じられない感覚による表現を使っているのではないかと思う。

これは環境の善しあしを評価する場合にも通じると思う。環境を部分的ではなく、総体としてその質を捉えるためには、人間と環境をつなぐダイナミックな心理的な相互作用を理解する必要がある。この拙文がそれを考えるひとつのきっかけとなってくれば幸いである。

参考文献

- 1) 中島義明・大野隆造編：人間行動学講座第3巻『すまう』、朝倉書店、1996
- 2) エンゲンT.：『匂いの心理学』（吉田正昭訳）、西村書店、1990
- 3) 大野隆造：環境視の概念と環境視情報の記述法、環境視情報の記述法とその応用に関する研究（その1）日本建築学会計画系論文報告、Vol. No. 451, pp. 85-92, 1993
- 4) Thiel, P.: People, Paths and Purposes: Notation for a participatory Envirotechnure. University of Washington Press, p.113, p.270, 1997
- 5) ギブソンJ.J.：『生態学的視覚論』（古崎敬ほか訳）、サイエンス社、1986

(おおの りゅうぞう)



樂茶碗

各論
I-1

照明の感じ方

佐川美術館 樂吉左衛門館 における光の作法

照明デザイナー

吉野弘恵



1965年生まれ。1988年大阪芸術大学卒業後、1990年TLヤマギワ研究所照明計画室、1997年ヤマギワ計画デザインセンターチーフデザイナー。2002年アカリ・アンド・デザインを設立。建築的照明をコンセプトに照明デザインを行う。

主なプロジェクトに、佐川美術館（平成10年度照明学会優秀施設賞）、中之島三井ビルディング（平成14年度照明学会優秀施設賞）、三重県立美術館（平成15年度照明学会優秀施設賞）、佐川美術館 樂吉左衛門館（平成19年度照明学会優秀施設賞、北米照明学会国際照明賞Award of Merit）がある。

e-mail:yoshino@akari-d.com

HP:http://www.akari-d.com

最初に、今回照明計画を行った樂吉左衛門館に展示する樂焼きとは何か？から説明する必要がある。まさにその中に、この美術館の光のコンセプトが含まれているからである。

樂（らく）茶碗は、桃山時代、佗（わ）び茶の大成者千利休の意を受け、陶工・長次郎によって始められた。以来、樂茶碗造りを継承する京都の樂家は、400年余りにわたって代を重ね、現在の十五代・樂吉左衛門氏に至るのである。一子相伝で技を伝える家としては、最も古い歴史を誇る家系である。当然、樂家は、吉左衛門氏のみが、茶碗や茶器のみを創作することが許されているのである。

その400年間、時代に左右されず、繰り返されてきた創作の場に身を置く樂家の十五代当主吉左衛門氏が初めて建築の創案も手がけたのが、この美術館である。そのコンセプトは「守破離（しゅはり）」である。千利休の「規矩作法（守りつくして 破るとも 離るとも 本をわするな）」から来た言葉である。それはまさに400年という歴史がもつ重みを感じることのできる言葉であり、それを体感できる美術館である。

■計画地

樂吉左衛門館は、滋賀県の琵琶湖湖畔にある佐川美術館本館の広大な水庭をさらに拡張し、その地下に展示空間を、地上には茶室を配置した美術館である。建築設計は、本館同様に竹中工務店である。



計画地

■美術館照明

美術館の照明といえば、これまでは、

- (1) 作品の保護（紫外線カットや赤外線カットなど）
- (2) 鑑賞の快適性（グレアレス、均斉度、配光、ガラス面への映り込みなど）
- (3) 空間の快適性（光のシークエンス、照度

バランス、など）

上記の3項目を守れば美術館照明であったし、事実、それで今まで何の問題もなかったのである。

しかし樂吉左衛門館は、そうではない現場であった。そこに作者の光に対する想いが加わるのである。その想いが加わってはじめて作品の意図する姿が照明によって浮き上がるのである。また、展示空間以外においても、“光”は作品の一部となっているのである。一見、特異に見える樂吉左衛門館であるが、よくよく考えてみると上記の美術館照明の3つの必須項目には、作家やアーティストの光への思いが入っていないのである。そう考えると、当代（樂吉左衛門氏）の作品や空間への光に対するこだわりは、当然のことであり、本来は、そうあるべきことかもしれないのである。（多種多様に使用する企画展示室などは、別として）。

■光の作法

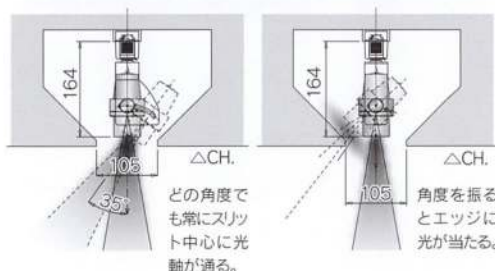
長きにわたり土や石、木や草花など自然素材に触れてこられた当代のコンセプトにあるのは、できるだけ手を加えず自然素材をありのままに見せること、またそれが斬新な空間を創り上げるという、まさに「守破離」という思想である。

照明計画においてその作品や空間へ思想を実現化するに当たり、まず、照明という人工的な光の気配を消すことが最重要項目であると考えた。また、そうすることが作品または、その特異な空間を象徴的に感じることができると感じたからである。

■ホールの照明

樂吉左衛門館を訪れると、最初に広大な水庭の下に配置された地下のホールへと導かれる。ブラックコンクリートと黒塗りされたベイマツのフローリング、そして彫刻的なバリ古材の長椅子、水盤からの波紋を印象的に壁面に映し出すトップライト、そのすべての要素が展示空間へのプロローグであり、また、強烈なインパクトのある世界観をつくり上げているのである、それはまさに彫刻的空間である。

その空間を照らす照明は、天井に彫り込ま



偏芯アームスポットライト 一般的なスポットライト

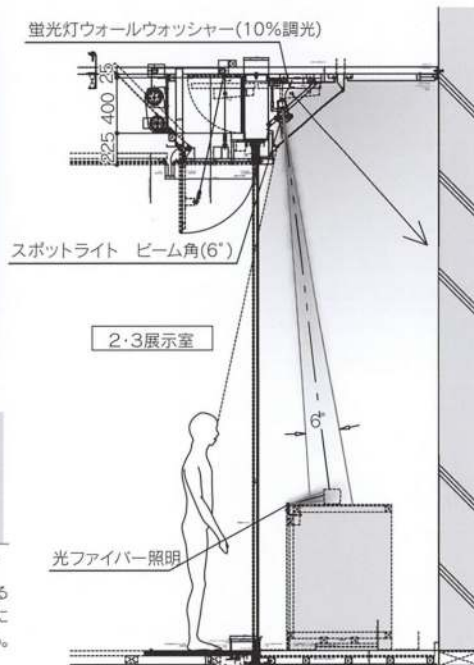
れた開口幅105mmのスリットに仕込まれている。そのスリット内部には、特注のスポットライトが仕込まれており、狭角な光によって床面に光のたまりを創り出している。

このスポットライトも、照明器具としての気配を消すための工夫を施している。一般的なスポットライトを天井のスリットに仕込んだ場合、灯具の角度を振るとどうしても光がスリットの開口部に当たりスリット部分が照らされたり、光が蹴られたりしてスリットに隠したはずのスポットライトが反対に目立ってしまうことがある。その対策として設計したのが、どの角度に首を傾けてもスリットの中心に光が通る偏芯アームである。このアームによってスリットが目立つことなく光が照射され、空間を象徴的に照らし出すことができるのである。この手法は、ホールだけでなく、展示室用のスポットライトでも採用されている。

■展示ケースの照明

展示室の展示ケース照明は、光の質が違う3種類の照明によって構成されている。樂茶碗だけを象徴的に浮き上がらせるスポットライト、ブラックコンクリートの壁面を照らすウォールウォッシャーライト。そして樂茶碗を立体的に浮き上がらせる光ファイバー照明である。

まず展示ケース用のスポットライトは、展



展示ケース断面

シェーカスの原寸大のモックアップを作成し、
 実際に展示される樂茶碗に光を当て、ビーム
 角などの微妙な光の調整を、当代を交えて幾
 度となく行った。最終的には樂茶碗を包み込
 むような光のたまりをつくり上げることで
 できるビーム角 6° という超狭角配光のスポッ
 トライトに決定した。

ウォールウォッシャーは均斉度の高い調光用の蛍光灯照明を採用し、約10%という最低照度に設定することでブラックコンクリートがほのかに照らされ、重厚な空間を印象づけている。一番難航したのが、樂茶碗を立体的に照らす光ファイバー照明である。幾度となく試作品をつくり検討してきたが、なかなかイメージ通りの光が出ず、改良の連続であった。ただ改良を繰り返すうち光ファイバー照明の理想的な形態や光の方向性が分かり始めたのである。

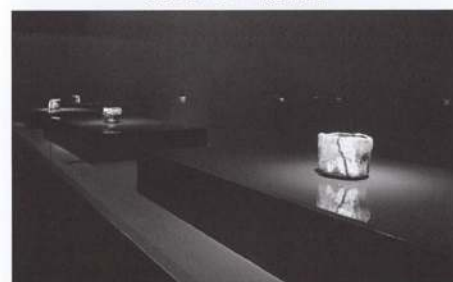
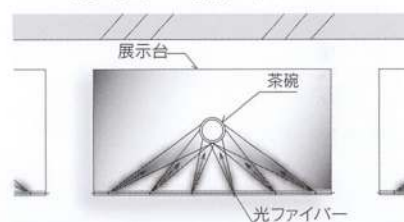
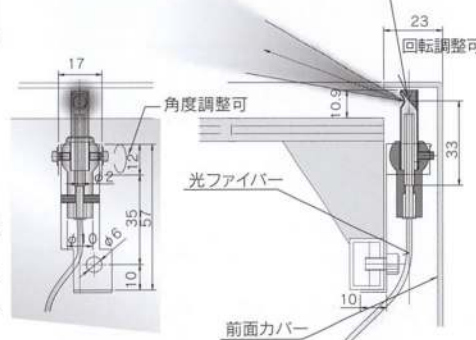
それにともない、以下の要望が出された。

- (1) 樂茶碗はそれほど大きいものでないため、ファイバー照明は極力小さくし、目立たないものにする。高さ10mmぐらいを目標にする。
- (2) ファイバーからの光は樂茶碗だけを照らし、後ろの壁面には影をつくらない。
- (3) ファイバーからの光は、展示台天板上にも光が当たらないようにする。

特に(1)と(3)は、小さくすればするほど展示台に光が当たるため矛盾した要望であるよう



反射鏡:AP電解研磨アルマイト鏡面仕上げ
(ドイツアラノド社製)



に思えた。しかし、その矛盾をクリアすれば今までにない光ファイバー照明ができる可能性があり、幾度となく試行錯誤をくりかえし開発を行った。最終的には光の反射制御と光学ロッドによって超狭角配光を創り出し、当初の試作品よりも1/5ほどの体積にまで小さくすることができた。

また小さくなったことで、展示台のエッジ部分の約10mmのスリットから光を照射することも可能になった。それにより、当初の茶碗1つに対し、2灯でなく多灯で照射することができるようになり、より立体的に見せることが可能になった。

展示照明は、この3つの光の要素を調光制御によって照度バランス、輝度バランスを調整することで楽茶碗をより象徴的に印象的に浮き上がらせることが可能になったのである。

■茶室の光

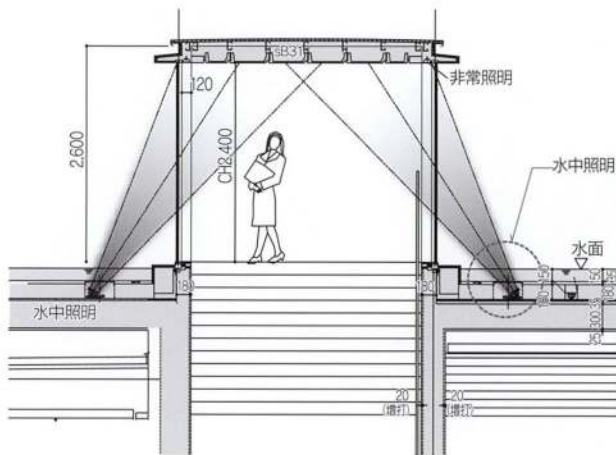
ブラックコンクリートの壁、縄で編まれた燻煙タケの天井、ジンバブエ産の黒御影の石割肌の床、手すきの和紙、それと大きく空いたサッシュの见えないガラス開口。天井、床、壁すべてにおいて人工照明を拒む空間であ



茶室



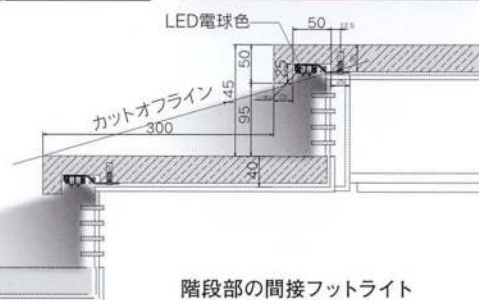
茶室夜景全景



階段室断面



階段部夜景



階段部の間接フットライト

る。そこで最低限の光として、また意匠性を損なわない光として鴨居の部分にシームレスラインの蛍光灯を仕込み、天井面を間接的に照らし上げている。また建築意匠の特徴となっている低く長く水庭まで延びる庇も、水底ピットに仕込まれた水中照明によってアップライトされており、この2つの間接的な光が天井面全体を浮き上がらせるとともに、水面に茶室の鏡像を映し出し、楽吉左衛門館を象徴する光を創り出している。

■余韻の光

楽吉左衛門館の茶室や展示空間という特異な空間を訪れた人が最後に通るのが、地下(水面下)から地上へと向かう階段である。それはある意味、非日常から日常へ引き戻される空間でもある。この階段をただ単に日常へと向かう通路にするのではなく、最後に少しでも光によって楽吉左衛門館の余韻を感じて帰途につくことのできる空間として照明計画を行った。

まず、天井面には一切照明器具を設けず水を象徴的に感じるよう水中照明によって階段室の天井面を照らし上げている。その水中照明も、ただ単に水底に置くのではなく、ピットを設け最小限の開口径から光だけを天井面に照射できるよう調整されている。また、地上へ向かう階段としての意味性を感じるよう、蹴上部にもLEDの間接照明が仕込まれ

ており、階段動線が象徴的に浮き上がる。

地上へ導く光の階段の天井面には、光の波紋が映し出され、幽玄な雰囲気を作り出している。

■目を閉じれば

当代の独創性と思想性、それと竹中工務店のデザイン性と技術力が、今までにない美術館をつくり上げた。この美術館を訪れたほとんどの人は最初、暗いと感じる。ただその人も美術館を去る時にはこの暗さの中の心地よさを感じることになる。現代は、明るすぎるゆえに見たいものが見えなくなったり、暗くないゆえに見たくないものまで見えたりしているのである。

音楽を聞くととき目を閉じる。

匂いを嗅ぐとき目を閉じる。

人は、真剣に物事を考えるとき目を閉じる。

暗いからこそ見えてくるものがあるのである。

ここは現代の明るさに対する考え方をもう一度原点から考えることのできる場所であるのかもしれない。またそれは、照明デザイナーとして戸惑うことも多い現場であったことも確かである。ただそれは、ある意味、照明デザイナー冥利につける現場であったことも確かである。

(よしの ひろやす)

椅子の感じ方 身体感覚のデザイン

武蔵野身体研究所

矢田部英正

武蔵野身体研究所主宰。

筑波大学大学院修了、体育学修士。学生時代は体操競技を専門とし、全日本選手権、インカレ等に出場。選手時代の姿勢訓練が高じて、日本の伝統的な身体技法を研究する。国際日本文化研究センター研究員を経て、学位論文「和装の起居様式に関する身体技法論的研究」にて博士号取得（被服学）。著書『椅子と日本人のからだ』晶文社、『たたずまいの美学～日本人の身体技法』中央公論新社、『美しい日本の身体』筑摩新書、『からだのメソッド』バジリコ出版など多数。東京女子大学、武蔵大学非常勤講師。

■身体感覚の論理

「身体技法」という立場から椅子作りにかかわって、はや10年が過ぎようとしている。顧客の身体条件に合わせたオーダーメイドという仕事の性質上、とくに留意してきた点は、自作に坐り続ける人々の10年後の身体状況を視野において、椅子を造形することである。というのも「心地よい」と感じる身体的な反応は、年代や性別、職種などの個人差だけでなく、同じ個人であっても体調や加齢によって時々刻々と変化するからである。継続して作品を愛用していただくためには、購入時にクライアントの感じ取る「心地よい」という感覚の先に、身体を本来あるべき自然な状態へと導くような、いわば身体に内在する自然本来の原則を見極めることなしに、この仕事は成立することはないと思っている。

「感覚」というのは「技術」と同様、訓練によって成長するものである。“make sense”という言葉の通り、「感覚」とは複雑多様な経験世界に「意味を形成する」ための明確な論理をもっている。したがって「感覚的」という言葉が「恣意的で、曖昧なもの」と受け取られる背景には、自ら感覚を鍛えるための方法を見失った社会状況すら見えてくる。目に見えない事柄に感覚を働かせる習慣が失われれば、こうした人間としての基本的な認識能力が疲弊していくように思われる。

見えない空気の振動に数学的な論理を与え、音楽の和声が一定の調和を保つように、骨格の配置や造形のリズムにも、統一性をもった調和を奏でる「アーテキュレーション」の働きがある。パウル・クレーの言葉を借りれば、それは「見えないものを見えるようにすること（『造形思考』）」を意味する。

素材や工法、流通にかかわる技術がどんなに進歩しても、人間の身体は数百年の時間単位ではそう大きく進化するものではない。「坐る」という技法についてもそうだが、人類の発祥とともに存在するその技法は、訓練によって同じ形を質的に「深化」させていく技術の方向性をもっている。この点、100年に満たない工学的な姿勢研究に比べて、1000年を超えて生き続ける日本とアジアの坐の伝統に私は深い信頼を寄せている。

■物質文化と身体技法のかかわり

「身体技法」という概念は、もとはフランスの民族学のなかから発祥し、物質文化との密接なかかわりのなかで発展してきた経緯がある。坐り方、歩き方、食事の作法や休息の取り方など、人間の動作は単に個人的なものばかりでなく、その社会に共通する集会的な特色をもっている。人間の動作の特徴は、立ち現れる傍から消えていく儚さをもっているが、その動きに一定の法則性があることを示す確かな情報が、道具の素材や造形のなかには集約されている。

靴のデザインは「歩き方」を伝える確かな資料であり、椅子のデザインには坐り方を読み解く具体的な情報が集約されている。そうした物質文化の一連のスタイルには、その社会で営まれる文化様式が体系的に描かれていると同時に、個々の作品からは、たとえば椅子ならば「どのような坐り方が想定されているのか」「いないのか」という、作者の「手と精神の働き」を克明に読み解くことができる。

たとえば椅子の背もたれにS字の弯曲をほどこす工夫が20世紀の後半あたりから盛んに取り入れられるようになるが、こうした潮流の下絵には、1953年に発表されたJ. J. キーガンの一連の研究が敷かれていることは、専門家の間では周知のことだろう。しかし実作の事例では、すでに14～15世紀の中国において、「S字」に弯曲した背をもつ椅子が一連のスタイルとして定着しており（図1）、またフランスにおいても、遅くとも17世紀には背骨の形状に沿った背もたれが出現している（図2）。

このように実作品から読み取れる身体技法の特色は、医科学的な理論よりも遙かに先行



図1 『民式家具研究』王世襄編
台北 南天書局有限公司より



図2 パリにて
筆者撮影

して、作家の想定する「心地よさの論理」を、坐る人間の身体へと直接的に訴えかけるのである。学問研究が発見の早晩を重んじるとするならば、「脊椎弯曲説」に関して言えば、実作品の論理は、キーガンの仮説よりも600年は先んじていることになる。

■研究者と制作者の立場

人間工学や整形医学をはじめとする科学的な姿勢研究では、「心地よさ」を云々する以前に、坐ることに起因する障害やストレスの問題をいかに解決するか、ということが主な関心事となってきた。「坐って腰が痛くならないこと」は、「心地よさ」を語る前提でもあるわけだが、実際に開発、デザイン、制作にまでかかわってみて、この問題を解決するために、先人がたいへんな労力を費やしてきたこともわかってきた。つまり患者の治療を専門とする整形医学の立場と、一般被験者を主な対象として測定評価を行う人間工学の立場と、そして実際に物を作るデザイナーや職人の立場と、それぞれの分野には専門特有の技術的な制約がある。この自明の前提を乗り越えて、異なる専門家が人間に対する共通の理解へと到達することは、単純なコラボレーションとは別次元の問題である。

作り手の立場から言うならば、仮に信頼に足る「坐姿勢の基準」が示されたとしても、それを実現するための椅子の身体支持条件には多種多様な手法がある。背の「S字弯曲」に限らず、半円形の「ラウンドバック」、スポークを用いた「ウィンザースタイル」「曲げ木」「クッション」「成形合板」、着座点の「弯曲」や座面の「前傾」「切り返し」など、椅子デザインの可能性は無限に広い。しかしその多様性のなかから一定の製作技法にテーマを絞り、「形を錬る」ということを積み上げることなしに、「身体其自然性」にもとづく造形の本質をつかみ取ることは不可能であるように思われる。

■身体感覚のデザイン

自作において扱ってきた形式のなかに、横方向の弯曲をほどこした「ラウンドバック」というスタイルがある。この手法は、50年余りにわたって改良をし続けた故ハンス・ウェ



図3 フランス帝政期の「ゴンドラ椅子」

図4 イタリアL'ORIGINE社の回転椅子 (共に筆者撮影)

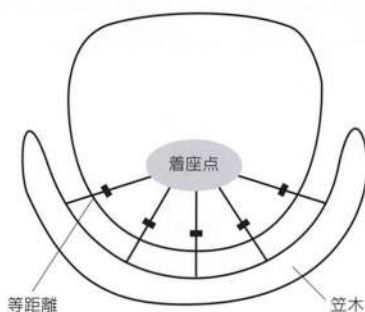


図5

グナーの仕事がもっとも有名なようだが、歴史を遡るとこのスタイルは、古代ギリシアの時代より存在し、ヨーロッパのクラシック家具では「ゴンドラ椅子」として一定の様式名まで与えられている(図3, 4)。

この様式の優れた点は、身体全体を包みこむような安心感があるのに加え、背もたれの全面が着座点からほぼ等距離にあることで、坐りながら上体を捻ったり、左右後方のどの方向に動いても、しっかり上体をサポートする仕組みになっている(図5)。

「ラウンドバック」の形式がヨーロッパの歴史を通じて広く定着した理由には、デザイン的な要因以上に、着座時の身体運動に沿った「造形の論理」が、明確に自覚されていたからでもあっただろう。

拙書『椅子と日本人のからだ』が刊行された2004年の当初、国内でこの形式の椅子は数えるほどしか知らなかった。こうした曲線的なデザインは、木材の歩留まりが非経済であるため、姿勢保持に対する明確な意識がない限り、作り手としてはなかなか手を出しにくい形である。しかし5年余りの歳月のなかで、国内にも上質で低価格な「ラウンドバック」の椅子が数多く流通するようになったことは、何も持論ばかりが原因ではないだろうが、明らかに見て取れる時代的な変化を感じている。

また拙書で主張したもっとも核心的な事柄

は、第三腰椎を中心とした「ランバーサポート」の手法に対する批判と、姿勢保持の基点を「骨盤」にもってくる「ペルヴィスサポート」の提唱だった。この理論は同年に中公叢書より刊行された『たたずまいの美学』でも示したように、日本古来の服飾様式から、身体技法を解説した知見に基づいている。

キモノの「帯」や「腰板」には、姿勢を保持する「背もたれ」と同様の役割があり、それは骨盤上部を幾重にも締めることによって、骨格の構造的な強さと精神的な集中力とを持続させる機能をもっていた。

坐姿勢を保持する場合においても、ウェスト部分の腰椎骨(lambar)を支えるのと、人体のなかでもっとも大きな「骨盤(pelvis)」を支えるのと、どちらがストレスに強いかと考えると、これは議論の余地もないほど明白である。

この考え方は、背中全体を支える「ハイバック」スタイルの椅子にはとくに有効で、ドライバーシートや長距離列車、旅客機、劇場などの座席については、腰部弯曲の突出点を座面から20cm以下に下げただけでも、腰へのストレスは大きく軽減される。

昨年ある女性誌の取材で、国内外の新車のシートを検証する依頼を受け、日本車が大きく変わってきていることを実感した。とくにトヨタ車の純正シートは、表面は柔らかくとも、体圧でシートが沈まないよう、骨盤部分に金属が埋め込まれていることなどもわかった。「ペルヴィスサポート」を明確に意識したこうした構造は、数年前には見られなかった進歩である。

それに対して、かつてはもっとも上質な坐り心地をもっていたボルボ、シトロエンなどは、ドイツ車の姿勢理論を踏襲する方向に向かい、持論にしたがえば現在、日本車の多くが欧州車のシートを凌駕する品質を備えるに至ったと感じている。

「日本の椅子は疲れる」という書き出しではじまる拙書『椅子と日本人のからだ』は、もはや書き換えられるべき時期にきた。そして日本の椅子文化が成熟しつつある昨今の兆しを、生活者のひとりとして心から喜んでい

(やたべ ひでまさ)



バーデハウス久米島リラクゼーションZONE

各論
I-3

水の感じ方

水を用いた空間、バーデハウス

(株)ミクプランニング

松田光司

1956年生まれ。
広島大学工学部建築学科卒業。
1986年(株)グローバルエンヴァイロメント
シンクタンク (GETT) 入社。1995年(株)ミ
クプランニングに入社。
現在、制作本部第二制作部部長。ミクプラ
ンニング独自の健康増進施設、各種バーデ
ハウス及びSPAプロジェクト等に参画し、
施設全体のプロデュース及び企画・設計を
おこなう。

人間は生態系の一部である。便利さや豊かさを求めて物質的繁栄を築いてきた反面、自然の法則を無視してきたことも否めない。その結果、地球的な規模のトラブルが起こりつつあるのが今日の姿であろう。

自然環境『水』『空気』『太陽』『土』『木』のどれをとっても万物の根源であり、不可欠な要素で、この環境を破壊すると、生き物が生き続けることは不可能になる。同様のことは当然、自然の法則の中で生きている人のカラダの中でも起こっている。私たちは自らのカラダにしのびよる自然からの警鐘に対して、ようやく自覚し始めたところであるといっても過言ではない。その反応は、こことカラダの双方の〈病〉として表層化する。

昨今騒がれるようになったエコロジーブームは生体が生き続けるための当然の帰結で、つまり、生態系社会の一部として快適に適合〈フィット〉することが、自らの生命を守り、新しい価値のある社会環境を築くことができることを確信したからにほかならない。

そのような時代の流れの中で、私たちは特に人の健康に着目し、バーデハウスという概念及びそれを利用した健康増進施設を提案してきた。ちなみに、バーデハウスは治療目的の医療施設ではなく、予防を主目的とした健康増進施設である。代表的な施設はバーデハウス久米島（沖縄県久米島町）とバーデハウス室戸（高知県室戸市）で、ともに海洋深層水を利用している。

海洋深層水は水深200m以下の深海の水で、海洋資源として様々な活用がなされている。表層水と異なり、産業排水や生活排水の影響をほとんど受けていないため、高い清浄性を有する。また、マグネシウムやカルシウムなど約60種のミネラルの宝庫で、年間を通じて温度も低く、水質の変化もない水である。

上記の2施設は、その特徴を生かして、脱塩しない純粋な海洋深層水をふんだんにプールに利用した、健康増進施設である。

■バーデハウスの構成

バーデハウスは、基本的に大きく5つゾーンで構成されている。

(1)バーデプールゾーン(2)SPA/サウナゾーン
(3)カウンセリングゾーン(4)トリートメントゾ

ーン(5)リラクゼーションゾーン

その中で中心となる水の施設が、バーデプールである。バーデプールとは、ドイツの伝統的な温泉療法施設の思想と漢方、鍼灸などの東洋療法の手法を取り入れた形のプールで、泳ぐプールではなく、水中運動プログラムと水流によるマッサージで血液、リンパの流れを良くし、健康増進（予防）をはかるプールである。バーデプールでは、下記の5つの水の物理的特性を生かし、予防に役立つ健康増進プログラムを提供している。

- (1)浮力⇒体重が1/10⇒負荷の軽減
- (2)静水圧⇒水深1.2mで1.13気圧⇒静脈リンパの還流
- (3)水温⇒不感温度35℃⇒副交感神経が優位
- (4)抵抗⇒水圧による負荷⇒運動効果の向上
- (5)動水圧⇒水流ノズルによる水中マッサージ⇒血流促進

これらの特性を生かした、人及び建築と水のかかわり方、感じ方を6つに分類してみた。

■水に浸る

バーデプールでは、水（井水、温泉水、海洋深層水等）を温めて、水温を一定（不感温度35℃）に保っている。体温に近い温度帯の水の中で、利用する人々は、羊水に包まれた感覚が体験できる。また水の種類によってもその体感は異なり、それぞれの水の違いを楽しむのである。高温の温泉浴とは異なり、バーデプールにおける不感温度35℃での入浴は副交感神経優位となり、高いリラクゼーションを得られることになる。

長時間水の中にいることで、浸る水はより清浄な水であることが必要となってくるため、バーデプールでは、塩の電気分解から生成される電解次亜塩素酸で殺菌を行っている。この殺菌方法で過度な塩素臭を防ぐこともできる。さらに両バーデハウスの場合は、中空糸膜を利用した濾過装置も導入していて、水の清浄性に万全を期している。

■水に浮く

水に浮くことは、地球上で重力から解放される唯一の方法である。バーデプールでは、スイミングプールのようなアクティブな水とのかかわり方〈泳ぐ〉でなく、〈浮く〉とい

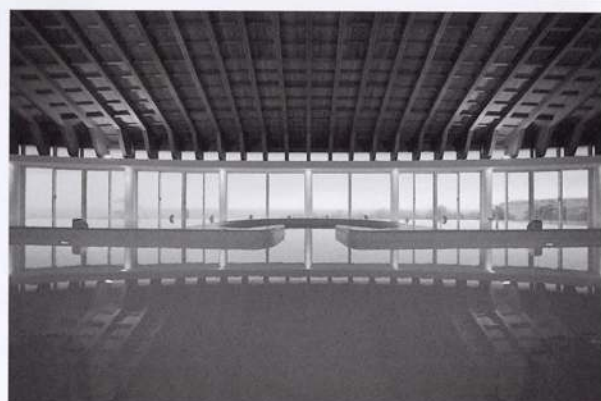
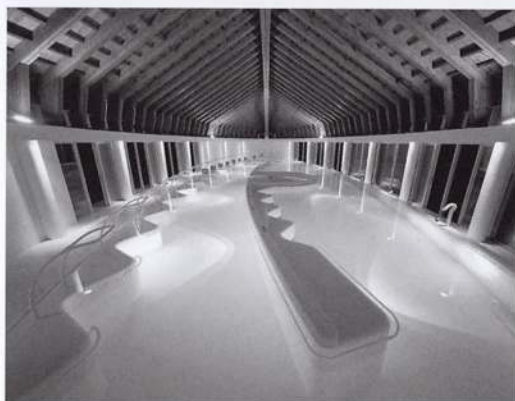


バーデハウス室戸鳥瞰
手前の3つの楕円の建物が
バーデハウス室戸

リラクゼーションZONE



バーデプール夜景内観(左)
バーデプール内観(右)



うパッシブなかかわり方を持つことで、水の持つ本来的な特性を体感することができる。また浮力で、老若男女にかかわらず、無理なくカラダを動かすことも容易となる。

バーデプールは浮いて利用することが多いので、利用者の視界に入る天井の仕上げは重要である。基本的に木製の素材を使うことが多い。施設の中は高温多湿であり、結露の防止等のために、集成材で大屋根を組むことが多く、そのことで、構造フレーム自体が空間のデザインの大きな構成要素になる。久米島、室戸の2施設の場合、海洋深層水の塩分による塩害の影響も加味しなくてはならず、木製の屋根はその意味でも重要となっている。

■水を観る

水は透明であるが、深さで色を意識できる。バーデプールの水深は1.2mであるが、本来の水の色を体感できる。清浄度が高いほど水の色が美しく、外光とのコラボレーションによる光のモアレの美しさは、さらに格別である。夜間は、プールがそれ自体、照明器具と

なるように、水中照明を配置し、光の水盤として空間の演出にも寄与している。

■水と遊ぶ

バーデプールでは、緩やかな運動（遊び）を体験する。各種の水流マッサージや、ストレッチング、水中歩行といった緩やかな運動（遊び）を行うことは、元来人間が持っている自己回復力を向上させ、予防にも効果を発揮している。

水の中での水圧や水の抵抗といった負荷要素を、運動のプログラムに取り込んでいる。施設の中には、スチームサウナも設けられており、これも水を蒸気として活用したひとつの形である。

■水と和む

バーデプールは、自然との一体感を大切にしている。目の前の海や、空や緑を借景として内部に積極的に取り込むことで、室内と室外を一体化している。久米島では特に、目の前のビーチとバーデハウスとの行き来をする

ことにより、積極的に自然との共生を生み出している。

リゾート施設で設けられるインフィニティ・プールなど、まさにその例のひとつである。

■水を飲む

水とのいちばん身近なかかわり方は飲む行為である。久米島、室戸の場合、海洋深層水を脱塩し、飲料用に加工している。2000年で海洋を循環しているミネラルの豊富な海洋深層水を体内に取り込むことで、カラダの中にも自然を取り込むことができるといえる。

私たちの提案する施設は、地域の活性化の目玉として企画することが多い。産業振興、雇用創出、観光誘致とさまざまな効果が期待される。地域とのかかわり方など、プロジェクトの成り立ちで役割が違う場合があるが、単なるハコモノとしてでなく、周辺環境と共生し、住民の健康増進に貢献し、ひいては自治体の発展に繋がるよう、今後も提案していくつもりである。

(まつだ みつじ)

食空間の感じ方

総合的な食環境の構築

食環境プロデューサー

木村ふみ

㈱エデュウス代表取締役、㈱ユーアイ代表取締役。

大学で美術史を専攻。国内外のホテルやレストラン、旅館、料亭などのテーブルトップコーディネートを始め、空間プロデュースやアートプログラムのプロデュース、テーブルメーカーの商品企画開発などを行う。2000年の九州・沖縄サミットの晩餐会ではテーブル装飾を企画制作。2007年には、六本木のサントリー美術館の「shop×café」を監修する。

著書多数。最新刊に「掬 musubu 木村ふみの仕事」(grambooks)。

■食空間の5つの要素

食空間は、大きく5つの要素から成り立っている。ひとつは建築的要素、これはいわゆる空間を構成する物理的なもので、床面積・天井高・開口部の有無などである。2つ目は人的要素と呼ばれるもので、具体的にはサービス動線といったサービスする側の動きやすさ、効率といったものがあげられる。もう一つの人的要素とはサービスされる側、つまりお客様の心地よさといったことで、テーブルとテーブルの間隔や出入りのしやすさといったことがあげられる。3つ目は演出的要素で、インテリアのデザインはもちろんだが、色調・音響・アート、食器などである。4つ目は味覚的要素で、食材の見せ方の有無、香りの出し方、シズル感の提供などをあげることができる。5つ目は経済的要素で、一席単価いくらで販売するか、つまり3000円と10000円の店が同じ雰囲気ではいけないわけで、価格によるイメージづくりと言えよう。

以上、5つの要素から成り立つ食空間は言い換えれば、サービスとゲストの合作で成り立つ空間であることは言うまでもない。

1つ目の建築的要素は専門家の手に委ねることとして、その他の4つの要素について考えてみたいと思う。

■人がつくり出す空間

人的要素の大きな部分を占めるものに、サービス動線がある。キッチンからホールへ、サービススタッフの動きがより美しく速やかに行われるかは、他の要素への影響が大きい。空間は洒落ているのに動きが悪いレストランや料亭をよく見かけるが、そういった店は客の入りも少なく、営業にも影響を与えている例が少なくない。サービススタッフが男性か女性かによって、使われる器の重さにも配慮しなければいけないし、スタッフ同士がすれ違うときのかっこ良さも、サービスパフォーマンスとして計算する必要がある。

その一方で、現場の声ばかりでつくられる空間にも注意を払う必要がある。例えばサー

シズル (sizzle) 消費者の五感に訴えかけ、生理的な欲求の次元から、商品の購買を促す広告表現の手法。

ビスの利便性だけを追求すると、ホールの一番良い場所にパントリーが配されるという事態が起きかねない。実際にプロジェクトを進めていく場合、よく問題になるのは現場の動きを優先するのかデザイナーのデザインを守るのかといった議論である。そんな時の解決策のひとつがゲストからの視点である。

人的要素の一角を成すゲストの視点は、時としてサービスやデザインといったことについて、驚くほどポイントをついてくることがある。ゲストが望む食空間とは、自分の持つイメージと味、価格の一致を意味している。どんなに素晴らしいデザインの空間でも、味が良くなければ納得できないし、あまりに価格が高ければ二度と足を踏み入れないであろうことは予測できる。要は、ゲストが最後に支払いをする時「ああ良かった、また来よう」と思わせる仕掛けが必要ということになる。

具体的手法のひとつにテーブルとテーブルの間隔がある。カフェや居酒屋などカジュアルな店は間隔が狭く、高級なレストランになるほど広くとる場合が多い。また床材も高級になると音の出にくいものを選んだりする。これも心地よさの演出のひとつであろう欠かさないポイントは、化粧室・トイレである。一見食空間とは直接かわりがないようであるが、最も重要とも言える。サービス、ゲストの気持ちが良い方向に作用するとアンビエンス（人と空間が醸し出す雰囲気）が生まれてくる。老舗のレストラン・料亭が確固たる地位を維持している背景には、常連の客と熟練のサービスがあるからである。人的要素を機能させるには、アンビエンスを生み出すための構築を展開する必要があることになる。

時にわれわれは想定人物をかなりリアルに設定し、プロジェクトを進める。そのための要素のひとつ、演出を考えてみたい。

■物語性のある空間

(1) アート・テーブルトップ・音響

演出に、インテリアデザインの役割がその大半を占めることは言うまでもないが、それを受けて生まれてくるものに、色調・照明・アート・テーブルトップ・音響があげられる。言葉を換えれば視覚・触覚・聴覚である。色調・空間の色は食欲をそそるものやテーマ

に沿ったものが良いが、われわれが気にとめるひとつにテーブルの天板の色がある。これは器とのバランス、料理とのバランス、照明の強弱と影響を与え合うもので、デザインが、先行して失敗することもある。料理や食材が食欲をそそるような空間が求められ、色調はおのずと和食・洋食・中国料理・寿司・天婦羅、さらに焼肉・ファミリーレストランに至るまで、細かくとらえ展開していく必要がある。色調や照明が建築的要素に近い演出であるとすれば、アート・テーブルトップ・音響は演出そのものと言える分野であろう。

アート・テーブルトップ・音響の3つに共通する点として、物語性をあげることができる。アートによって空間の持つコンセプト、フィロソフィ、場合によっては店の「格」までも表現することがある。絵画や彫刻、アートファクト（装飾品全般）によって作家の持つテーマ性と空間の伝えたいコンセプトを一致させ、物語を生み出していくことになる。

同じようにテーブルトップ、食器の役割もストーリー性が絡んでくる。フードプレゼンテーションのコンセプト、つまり料理人の思いをどう表現するかを考える場合、器の持つ背景が力となる。器の産地や歴史・絵柄の意味などである。ひいては、サービス手法や価格にまで影響を与え、店の物語性や格を伝えるのが器であろう。

一方、音響は単にBGMだけをさすのではなく、ミュージック、ランズケープ（風景）、音の背景と呼ばれるように水音や環境音などを含め、大きくとらえる必要がある。

（2）1970年代から2000年代へ

食環境のプロデュースという中で、この物語性のある空間をいかに作り上げていくか、言い換えれば演出要素の完成度をどこまで高められるかが、大きな鍵となる。それはいわゆるノウハウ「形式知」での手法というよりは「暗黙知」、言葉にできないものをどう表現するかということなのではないだろうか。

ホテルを例に考えてみると、1970年代のホテルはいわゆるグランド型と呼ばれるもので、建物は四角く豆腐型とも言われていた。どの地域を訪れても同じような形のホテルで、特徴としては衛生的、料金が明確、安全

といったことがあげられ、メカニカルマネジメント（機械的経営）の時代と呼ばれている。1980年代から90年代前半のホテルはヒューマニスティックマネジメント（人的経営）と言われ、情報が大きな力を持つこととなる。例えばデザイナーが誰か、シェフが誰かといったことがひとつの情報となり雑誌などで取り上げられ、末端まで広まった時代である。このころ話題になったのが、デザイナーズホテルと呼ばれるものである。ところが、これらのホテルの問題点も見えてくるようになる。例えば、デザインは良いが使い勝手が悪いとか、一度は行くがリピート客がつかない、サービス動線が悪いといったことである。それらをふまえて変化してきたのが、1990年代後半から2000年代のホテルで、基本には忠実だが洒落ている、普通だが今までと違うといったことをめざしたものである。リファインドマネジメント（精神的経営）などと呼ばれるようになる。ちょうど本物志向、心の時代と言われたころのことである。この時代から演出ということがより求められるようになり、ホテルからレストランへと広がっていった。デザインと運営ということが、より具体的な形で結びつき始めた時期でもあったように思う。空間へのこだわり、器へのこだわり、さらにはアートや音響へのこだわりが、より求められるようになり、新たな展開を見せ始めたのである。

（3）物語性のある空間を生み出す

ホテルやレストランが単においしい食事をするためだけではなく、食以外の要素、つまり器、アート、音響、空間といったことの知識や情報を交換する「場」でもあることが、物語性のある空間を生み出すことによって、より強く印象づけられたに違いない。

■シズル感のある空間

4番目の要素である味覚は、食環境を構築する上での新しい表現方法と言えるかもしれない。味覚は本来舌で味わうものだが、それを視覚に訴えようとする試みである。ここ数年来特に注目されている要素で、味覚を視覚や嗅覚で表現しようとするものである。例えば食材の見せ方や香りの出し方、シズル感の提供などである。この背景にはオープンキッ

チンの流行もあげることができる。従来のカウンターとは違い、キッチンのシズル感や食材のダイナミックさ、香りや火・煙の効果などをどう見せるかという新たな挑戦でもあったように思う。それにともなう食材用の器やかご、香りの調節、煙の流れにともなう空調や照明の調整などをどう展開するかということである。

そのことから派生するキッチンの動きや音の問題、ひいてはユニフォームに至るまで、シズル感を提供するために様々な事柄が生まれてきた。

実際にそこで使用されている器などは、水に強く、音が出にくく、コンセプトテーマに合ったものということになる。例えば、イタリアンのレストランではオリーブを漬けている樽やバスケット、テラコッタの素材といったものにあることが多いし、フレンチであれば見せるキッチン用具を意識して銅鍋やぶどうのつるで編んだ籠などが組み合わされる。

一方、シズル感のある空間という視点で見ると、ブッフエスタイルの食事があげられる。最近ではブッフエ専門のレストランや、ホテル宴会でのブッフエスタイルも什器備品に工夫が見られ、使用される素材も陶磁器やガラス製品のほかにもプラスチックやアクリルなど、さらにステンレスや樹脂など多岐にわたっている。

味覚的要素は、今や和食・洋食・中国料理を問わず、様々な料理分野の中で求められている一方で、そろそろそのクラスファイド化、つまり客単価などによる差別化の必要性が言われ始めているように思う。言い換えると、高級なオープンキッチンとそうでないものを、どう違いを出していくのか、ということである。

■心地よい空間

経済的要素は、明確にお客様にいかにより心地よく、気持ちよくお店をあとにさせていただくかの工夫にほかならない。言い換えれば、客単価3000円には3000円なりの心地よさがあり、30000円には30000円の気持ちよさをつくり出さなければならないということである。雰囲気・空間・味・サービス・価格などがひとつになり、お客が納得のいく心地よさ、

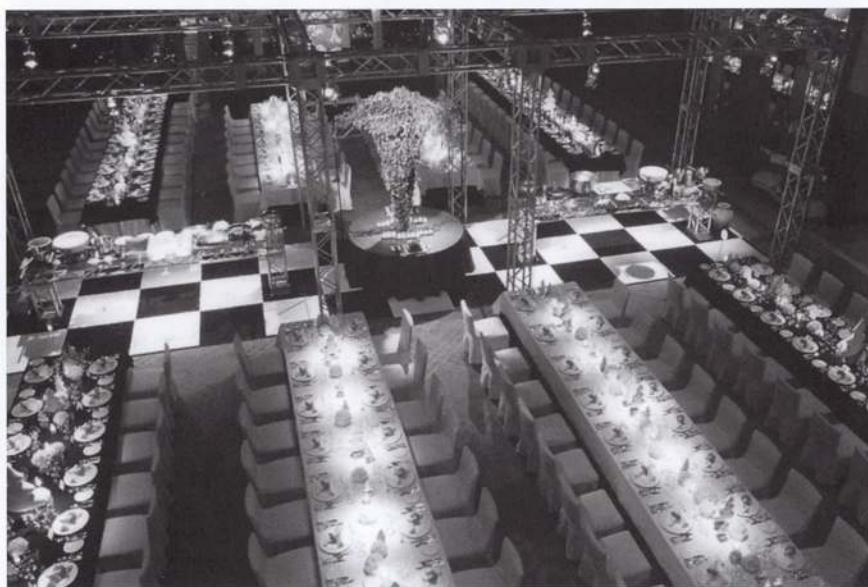


エンペラーの銀
銀色の壁面を背に、
ベージュと白のトーン
で用意された「エン
ペラーの玉座」を思
わせる座。その前
には吉祥文の布のかか
った盆に茶器が置か
れている。銀は、い
ぶしたような表情を
見せるかと思えば、
優雅なやわらかさ
を見せるといった変化
(へんげ) の存在だ。

アンディ・
ウォーホルの
「グレープ」
最初に渋谷の高
層ホテル工事現
場の41階に立っ
た時、天井の高
さと開放感のあ
る空間に、核と
なる作品が必要
だと感じた。奥
の正面にアンデ



ィ・ウォーホルの「グレープ」を4点飾ることを決めたのはその時だ。何年かたって現場にもどって
みると、作品は前からそこにあったかのように堂々と構えていた。
美しい夜景の中に浮かぶこの空間は、お酒を楽しむには最高の場所だ。



BON VIVANT 「ワインを楽しむ人生」をテーマにしたパーティは、中央にライブキッチンをつく
ることから始まった。186人のゲストが着席する中央にはトラスが組まれ、鍋や調味料が持ち込ま
れた。真ん中には巨大な葡萄のアレンジが飾られ、クックコートを着たシェフたちが生き生きと動
き回る。香りと音がダイナミックに会場を包み込む。

気持ちよさが生まれるわけで、そこにズレが
生じてはならない。具体的には床の歩き心地、
トイレの清潔感、空間の高級感などはインテ
リアや照明、機能といったことからつめてい
くことができ、総合的なデザイン力に委ねる
ことができよう。

一方の味、サービスは食材の鮮度に始まり、
サービスは熟練度で計ることができるのかも
しれない。さらに難しいことには、これらの
目に見えにくいものに値段をつける作業であ
る。多くの場合、材料やコストから割り出す
ことになるが、外国の場合などはチップとい
う制度によってあからさまに計られる。その
制度の善しあしの議論は別として、そのこと
でサービスのクオリティーが上がっているこ
とは一流になるほど、確かなような気がする。

■かたい空間からやわらかい空間へ

食空間の感じ方は人それぞれで、それらを
組み立てるための構成要素は今まで述べたよ
うに、大きく5つの要素に分類できる。(1)
建築的要素 (2) 人的要素 (3) 演出的要素
(4) 味覚的要素 (5) 経済的要素である。
この5つの要素は、目に見えないものを具現
化するための手立てである。楽しさ、おいし
さ、おもしろさ、サービス、思い、心地よさ、
贅沢さ、あげればきりがなが、そういった
ものを具現化するのが食環境プロデュースと
いう仕事である。それはあくまでも「形式知」
ノウハウというよりは「暗黙知」ノウハウと
いって良いのかもしれない。

20世紀は強者の文化ということがよく言
われる。建築技術は強いガラスや素材を生み、
より高い高層建築を可能にしてきた。そこで
は永遠が求められ、不変に心をくだし、知識
や情報が大切にされてきた。実に素晴らしい
ことだと思う。一方、21世紀は弱者の文化と
言われている。自然や変化すること、目に見
えないものを求め、なつかしさややさしさを
求める時代だと思う。その時代に問われるの
は、情報よりもむしろ情緒が大切であるとい
うことではないだろうか。食環境はそのこと
をふまえ、「かたい空間」から「やわらかい
空間」へと移行しているように思う。だから
こそ、食環境の総合的な構築が問われている
のではないだろうか。 (きむら ふみ)

花の感じ方

フラワーデザインと空間論

フラワーデザイナー

頼末麻起子

武蔵野美術短期大学油彩画科卒業。

アメリカンスタイルのフラワーアレンジを学び、(株)レイボウ（ホテルニューオータニ系）入社。その後、(株)イトキン エミリオ・ロバ事業部に入社。スペース・デコ部門にて、アートフラワーでの空間装飾を、企画から施工までを担当（関西のデパートディスプレイ装飾中心に、ホテルのエントランスや、ブライダル装飾など）。アートフラワー装飾の無限に近い表現の世界に魅了され、退社後、有限会社フローラルアクトを立ち上げ、アートフラワーを使った装飾の企画から施工までを、ホテル装飾メインで展開している。

フラワーデザインの効果は、大きく分けると二つあるといえる。一つは、ディスプレイ的に強い要素を持つもので、インパクトが強く、人を引き寄せる効果のあるもの。もう一つは、インテリア要素的なもので、空間のコンセプトに連動させ、一貫性のある空間づくりに沿って華やぎと柔らかさを持たせ、居心地のよい空間をもたらすもの。

この二つのどちらか、または二つを混合したものが、その効果といえる。

■ディスプレイ的要素の強い フラワーデザイン

ディスプレイ的要素の強いフラワーデザインは、例にあげると、主にデパートなどの商品を販売目的とする場合に効果的である。ショーウィンドーや館内のエントランスディスプレイは、来客の入館したい気持ちを引き出し、エスカレーター前などのVP（ビジュアルポイント）の華やかな装飾は来訪者を引き寄せる効果があるので、来訪者の流れをつくるのもフラワーディスプレイの効果の一つといえるであろう。

こういった空間では商品を見やすくするため、シンプルで空間が多く、テーマ性の強いアートのディスプレイや季節性を打ち出した表現により、様々な空間を展開していく。常に視覚的に新鮮な場面をつくることにより、季節と流行の移り変わりにアプローチし、購買欲をかきたて、来訪者に再度の来館を促すのである。

■インテリア的要素のフラワーデザイン

インテリア的要素のフラワーデザインは、ホテルやレストランなど来訪者にサービスの提供を目的とする場合で、コンセプトに沿った花装飾をすることにより、空間をイメージアップさせるのに効果的である。コンセプトについては、空、海、花など抽象的なもの、または特定の外国の都市のイメージ（プロバンス風、スペイン風、パリ風など）、デザイン様式的（クラシックヨーロッパ、和風、モダン、ナチュラルなど）など様々である。

フラワーデザインを企画するとき、場面によりイメージする花や器、アレンジの形、色合わせ、花の種類表現で変化させ、さらに

色系、香り、設置場所などを含め検討することにより、空間の表現力を最も力強くアピールし、心地よい空間を来訪者に印象づけることができるのである。

【例1】イメージの花や器で表現

スペインのイメージをコンセプトにした商業施設を考えてみると、スペインの街のロケーションイメージや印象をデフォルメして表現。色は情熱的な赤の花をメインにし、青い磁器の壁掛けやテラコッタの鉢に、自然に赤いゼラニウムをあしらうなどスペインらしさを強調することにより、来訪者に、まるでスペインに居るような非日常的臨場感（または日常を離れた贅沢感）を与える効果がある。



スバニッシュホテルの玄関：ナチュラルスタイルのアレンジ

【例2】アレンジの形で表現

近未来的モダンをコンセプトにした商業空間であれば、一つひとつのシーンを、あえて無機質に表現。個性的なフラワーオブジェを演出していくことによりインパクトの強いシーンの印象をつくりあげ、来訪者に対して現代的、非日常的、斬新さを体感させることができるのである。



ベルギーモダンホテルのロビー：モダンスタイルアレンジ

【例3】色合わせで表現

デザイン様式がヨーロッパクラシックとした施設であれば、古典的要素を出すため、アンティークなボタニカルアート（植物細密画）のように多色使いにし、フォルムは古典的な形で表現。たっぷりとした量感と、重厚

で艶やかな色調で表現することにより、来訪者にはヨーロッパのホテルに在るような贅沢な臨場感を与える効果がある。



ヨーロッパクラシックスタイルのレストラン

【例4】花の種類で表現

リゾートホテル、バリ風エステティックサロンやレストランなどのトロピカルなイメージの商業施設であれば、蘭やヘリコニア、ストレチア、アンスリュームなど、南洋の花の種類を使うことによって、トロピカルな空間を来訪者に感じさせる効果がある。



バリ島のリゾートホテル：EVホールの、蘭を使ったモダンアレンジ

■花の色の効果と設置場所

花の色が与える効果だが、大雑把に表現すると暖色は心理的に動的に働き、寒色は静的に働く。

暖色の花や、華やかな色調のデザインは見る側にインパクトを与え、引き寄せ、心理的にも明るく楽しい気持ちにさせる。例えばキッズルームには明るい花の色が好まれ、レストランでも、赤～黄色は食欲を呼び起こす色といわれているので暖色で装飾する場合が多い。また施設の顔でもあるエントランス部分には、暖色系で、明るく、華やかなフラワーデザインをすることにより、来訪者が見る最初のシーンを、贅沢なインパクトで印象づけるのに効果的である。

寒色の花や淡い色調、グリーンアレンジは、見る側を心理的にも静め、落ち着かせ、その場にとどめる効果がある。ラウンジ、アロマルームなど、利用者のとどまる場所の花は周囲の色調に同調させたり、淡い色調にしたり、長く視界に入っても気にならない色目や大きさ、さりげないデザインをすることにより、利用者を落ち着かせ、居心地よくするのに効果的である。

グリーンアレンジ、ハーブ系などは気持ちりをリラックス、リフレッシュさせる効果があるので、オフィス、図書館や寝室などにも適している。

加えて、照明による花の色の見え方にも気をつけなければならない。照明をあてた段階で見える印象が、最終的に来訪者に見える色だからである。暖色系（黄色など）は発色を豊かにし、寒色系（紫色など）は光を吸収し、発色を抑えてしまう。例えば、照度を落とした黄色がかったライトの下では、ブルー、パープル系または薄い中間色は暗く灰色に見える、フォルムが花だけに生命力の無い、枯れたような花に写ってしまい、華やかな場面には不向きであるといえる。

■香りにより拡大するイメージ

フラワーデザインは視覚と同時に、嗅覚でもイメージを拡大させることができる。四季や行事を先取りし視覚で体感させることと同時に、香りの高い季節花を使ったフラワーデザインは、シーズンの訪れを嗅覚においてもイメージさせるのである。例えば、春のフリージア、夏のくちなし、ラベンダー、冬の水仙など。

また、華やかなイメージの演出を引き出す場面では、薔薇や百合、ジャスミンなど、香りも豊かで視覚的にも高級感のある花材を使うことにより、視覚からも嗅覚からも同時に贅沢な空間を体感させることができる。

ナチュラルな空間では、ミント、ラベンダーなどハーブ系のアレンジやグリーンプランツなどを飾ることで、視覚的にはさりげない癒し系を表現すると同時に、嗅覚的にもハーブの香りを楽しむことによりリラックス、リフレッシュさせることができる。

■フラワーデザインとは

フラワーデザインとは、例えてみれば舞台美術における舞台のセットのようなものだと思っている。それは、同じ空間でも、幕が閉まり再び開くと、違う場面を容易に展開できるという点においてである。床、花台の上、壁、天井とあらゆる空間を流動的に装飾演出ができ、見る側には、次々に変化していく意外性で興味を持たせ、豪華な花演出で満足感を与えることができる。



装飾前の空間



イングリッシュガーデンを演出（フェイクグリーン使用）

フラワーデザインは非常に感覚的なものであり、ファッションのように流行があり、遊びの要素もある。それゆえに、見る側の心にも柔軟に働きかけ、空間全体を親しみやすくさせる効果があるのではないかと考える。

（よりすえ まきこ）

空間に対する感じ方の 定量化

空間の明るさ感指標による 照明設計

パナソニック電工(株)

岩井 彌



1967年生。1991年3月千葉大学大学院工学研究科画像工学専攻修士課程修了。同年4月松下電工株式会社(2008年10月よりパナソニック電工株式会社に社名変更)に入社。現在、同社中央照明エンジニアリング総合部照明ソフト開発グループにて、照明ソフトエンジニアとして、照明ソフトの技術開発に従事。

日本照明学会、日本照明委員会、日本色彩学会、日本建築学会、日本電気設備学会、日本視覚学会各会員。

■「光」にこだわる建築空間と照明設計

最近、「光」にこだわった建築空間が増えてきている。照明を変えるだけで建築空間のイメージががらりと変わるという事実が、個人レベルにもかなり浸透してきたと感じる。一室一灯の照明だった従来の個人住宅の照明が、一室複数灯になり、間接照明や建築化照明を採用するようになってきたのである。

しかし、従来の照明設計の指標とされていたJIS照度基準¹⁾を拠り所とする床面照度や机上面照度などの、水平面照度に基づく照明設計では、これら間接照明や建築化照明を適切に設計できないことが、照明設計にかかわる人の多くには、すでに常識的な知見となっていた。そのため、これらこだわりの照明の実現は、数多くの照明にかかわってきた経験豊富な一部の照明設計者や照明デザイナーなどによって、経験に裏打ちされたノウハウにより行われてきたのである。

■照明設計と「空間の明るさ感」

われわれは照明空間を観察するときに、「この空間は暗い」や「この空間は明るすぎる」などというような表現を用いて、空間に対する明るさの印象を素直に感じ、表現する。この空間に対して感じる明るさの感覚に対応した心理量は、まだ正式な用語として定義はされていないものの、「空間の明るさ感」と一般的に呼ばれ、学術的にも広く使われている²⁾。

「明るい空間は活気のある空間を演出する」「明るさを抑えた空間は、しっとりと落ち着いた空間を演出する」など、空間のイメージは、「空間の明るさ感」と密接につながっている。間接照明や建築化照明に対する照明設計をむずかしくしているのも、この「空間の明るさ感」の予測が困難なことが要因であると言っても過言ではない。十分に明るい空間となっているのに、水平面照度が低くなりがちの間接照明や建築化照明は、「十分に明るさ感を得ている」と言い切ることさえ、今までではできなかったのである。

■空間の明るさ感指標「Feu」の開発

以上のことを背景に、「空間の明るさ感」を予測する技術開発が、今まで数多くの研究

者により行われてきた。それらの技術の中でわれわれが目にしたのは、「色モード境界輝度」による空間に対する感覚の定量化理論³⁾である。この理論の優れているところは、心理量である「空間の明るさ感」を「色モード境界輝度」という輝度で定量化している点にあり、現在の照明設計で用いられている照度や輝度と同様に扱える点で実用性が高い。

そしてわれわれは、この「色モード境界輝度」を、視野の輝度分布から予測できる方法を検討し、下記(1)式に示す空間の明るさ感指標Feuの算出式を求めた⁴⁾。

$$Feu = 1.5 \cdot Lg0.7 \cdot \dots \cdot (1)$$

ここでLgは、空間の評価に影響を与えると報告された⁵⁾観察位置からの上下85度(視点上側35度+下側50度)×左右100度の視野内の幾何平均輝度値である。さらに、住宅居間空間としてちょうど良い明るさを感じる空間のFeu値が10となるよう、式(1)の係数1.5が設定された。

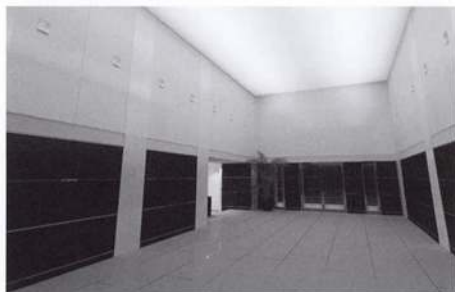
Feu値は、式(1)により、視野の輝度分布から計算で求めることが可能であるため、照明設計に不可欠な設計条件からの予測が可能であり、CCDなどを用いて輝度分布を得ることで計測も可能である。そして、様々な空間のFeu値を算出した結果、机上面平均照度で750(lx)設計のオフィス空間のFeu値は12~14、標準的な明るさのオフィスの廊下のFeu値は8~13に数多く存在することが分かった。

なお、「Feu」は「火」や「炎」の意味のフランス語であり、「フー」と発音される。

■「空間の明るさ感」と「Feu」

図1に、照明方法の異なるエントランス空間のCG画像による比較を示す。左は上方向に配光を持つ壁付け照明器具により天井面を照明したやわらかい印象を与える間接照明の空間であり、右の空間は、眩しさを感じさせないグレアレスダウンライトを用いて床面を重点的に照明することで、しっとりと落ち着いた印象を演出している。

比較して、どちらの空間が明るく感じられるかと言うと、左の空間であるということは明らかに分かる。ところが、現在の照明設計の拠り所となっている床面平均水平面照度を



▲120 (lx) Feu 10

図1 照明方法の異なるエントランス空間の比較

▲190 (lx) Feu 6

計算で求めると、左が120 (lx) で、右が190 (lx) と、右のほうが高い値になるのである。

現在の照明設計では、平面図に水平面照度分布とともにその平均値を示した照度分布図で、照明のよしあしを判断することが多い。すなわち、水平面平均照度を拠り所とする現在の照明設計では、図1の場合、照度分布図に示されている平均水平面照度の値を見て、右空間のほうが明るいとは判断されてしまう可能性が高かったのである。また、左の空間の床面平均照度120 (lx) は、一般的にエントランス空間としては低い照度を示している [共用住宅の共用部ロビーに対してJIS照度基準で示されている照度範囲は150~300 (lx) である]。したがって、歩行するには十分な照度 [加齢を配慮しても50 (lx) あれば問題ない⁶⁾] が確保されているのにもかかわらず、必要な空間の明るさ感が得られているのか不安を感じるのが、図1左の間接照明による照明空間なのである。

ところが、ここでFeu値を計算すると、左空間はFeu10で右空間はFeu6と、実際に空間に対して感じる通り、左空間のほうが右空間よりも明るい空間であることが定量的に表現できるようになる。さらに左空間は、エントランス空間として標準的な明るさであるFeu値の範囲、Feu6~10を満たしているので、安心して必要な明るさが確保されている

と判断することができる。

このようにFeuは、水平面照度では取り扱うことが困難であった「空間の明るさ感」を精度良く定量的に予測できることを最大の特徴にしている。

■省エネ照明方法と「Feu」

図2に示す左右2種類の照明空間は、どちらも同じ種類の42W形 (光束4500 lm) のコンパクト形蛍光灯ランプを光源とするダウンライトである。右空間は全般照明形のダウンライトを中央部に5灯配灯した照明空間であるのに対し、左空間は壁面を重点的に照明するように配光設計されたウォールウォッシャー形ダウンライトを周辺に4灯配灯している。すなわち左空間は、特に店舗の照明設計において明るさ感を得るために経験的に行われていた「壁面を重点的に照明することにより、効率良く高い明るさ感を得る」照明方法である。実際に、図2に示されているCG画像を見ても、左空間のほうが右空間よりも明るく感じる。しかも、左空間で用いているダウンライトは1台少ないことから、「左の照明空間は、右空間に比べて、より省エネルギーで、より高い明るさ感を実現している省エネルギーな照明計画である」と訴求できるはずである。そして、このような訴求は、地球環境保全を意識しなければならない現在におい

て、大変重要な意味を持つ。

しかし、そのような左空間の優位性を訴求できないのが、現在の照明設計の問題点なのである。なぜなら、図1の事例と同様、照度を拠り所としている現在の照明設計では、床面平均水平面照度の高いことを根拠に、左空間よりも右空間のほうが明るい空間と判断されてしまうからである。

ところが、このような場合にもFeuを用いれば、右空間のFeu値が9.5であるのに対して、左空間のFeu値が12.5というように、左空間のほうが右空間よりも明るい空間であることを数字で定量的に表現することができる。特に机上での詳細な視作業が要求されない空間であれば、Feuを用いることにより、左空間のほうが右空間よりも、高い明るさ感を、より少ないエネルギーで実現できているということを明確に言い切ることができる。

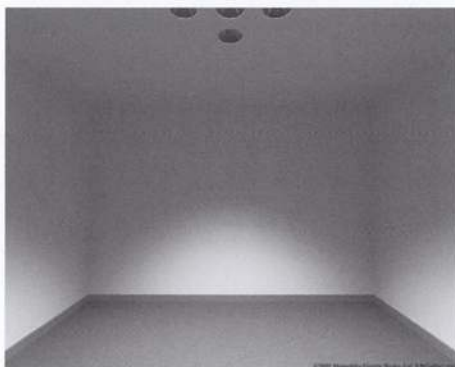
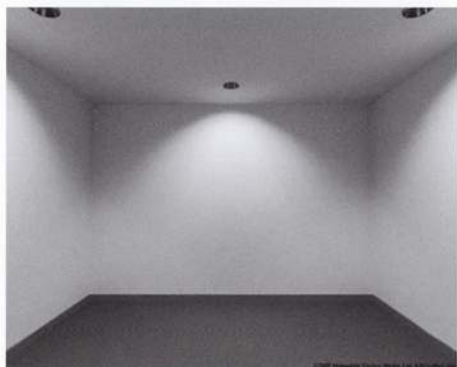
■世の中の照明をより良くするために…

空間の明るさ感指標「Feu」を活用することで、今までは定性的な表現で訴求がむずかかった、間接照明や建築化照明の十分な明るさ感の訴求や、壁面や天井面を効果的に照明することで必要な明るさ感をより少ないエネルギーで確保していた照明方法の訴求が、定量的に数字で説明できるようになった。

これらの訴求は、世の中の照明をより快適で良い照明にしていくために続けていかなければならないことであり、照明設計にかかわる、より多くの方々の理解を得る必要があると考えている。空間の明るさ感指標「Feu」は世の中の照明をより良く快適な照明空間へと展開していくための重要な指標の一つであると捉え、より一層の普及促進に努めていきたい。

参考文献

- 1) 照度基準、JIS Z9110-1979
- 2) 特集 明るさ感の研究と活用事例、照明学会誌、86-2、pp.746-786 (2002)
- 3) 山口秀樹、篠田博之、池田光男：照明認識視空間の明るさサイズの測定による実環境における空間の明るさ感の評価、照学誌、86-11、pp.830-836 (2002)
- 4) 岩井 彌：照明ソフト理論による省エネ、電気設備学会誌、28-1、pp.20-23 (2008)
- 5) 畑田豊彦：VDTと視覚特性、人間工学、22-2、pp.45-52 (1986)
- 6) 岩井 彌：高齢者の視覚特性を考慮した照明方法、松下電工技報、Aug.2003、pp.16-23 (2003)



▲290 (lx) Feu 12.5 168W

図2 照明方法の異なるダウンライト空間の比較

▲420 (lx) Feu 9.5 210W

(いらい わたる)

原理を生み出す空間設計

クリエイティブディレクター

服部滋樹

1970年大阪生まれ。

graf代表・デザイナー・クリエイティブディレクター。京都精華大学デザイン学部建築学科准教授。

1998年大阪、南堀江にショールーム“graf”をオープン。2000年“decorative mode no.3”設立。同年、中之島に移転し、“graf bld.”を設立。

オリジナル家具の企画・製作・販売、店舗・住宅・建築設計、プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、ブランディングに至るまで、プロジェクトごとに幅広い活動を行っている。

■私たちの求める環境

バブル崩壊後、社会に求めたこと。高度成長期以降、経済の連鎖反応はモノのあり方や生まれ方を変化させてきた。デザインの役割も同じく、変化している。不便だった世の中を明るく導くため、デザインは何をしてきたのか？ 豊かな暮らしのために一つずつそれらを整え、それぞれの機能を明確に整理すること。そんな使命が、少なくともデザインに求められるコトであった。すなわち、カタチのデザインではなく、機能を整理すること。以降、大量生産大量消費とピラミット型の生産システムによって生まれ、機能的に備わったモノたちは、世界中に普及していった。

そして現在、デザインとは何のために、何の役割として存在しているのか？ テクノロジーの発展とともに、コミュニケーションまで簡略化、また「情緒」のような感覚的風景をも失いかけている。満たされた機能はヒトを退化させ、経済というキーワードにデザインは衣替えし、そもそものあり方を見失っている。それは機能を柱に、周りを取り巻く情報のみをデザインする、そんな感覚に近い。

バブル崩壊後、デザイナーのあり方も変化する。例えば、プロダクトデザイナーはモノのデザインだけでは完成されない、周りの状況をも考えインフラ、パッケージ、ショップ、MD、モノ以外の状況をデザインすることも同時に考えなければならない。デザインの役割が変わってきたコトと同じように、デザイナーも変化する。

モノ、コトのデザインへ。景気を境に、あり方、事態が常に問われるようになる。

そんな時代のさなか、私たちが考えたモノづくりの環境とは、

- ・モノが生まれやすい環境として
- ・カテゴリーを超え、補い合える才能
- ・アイデアがすぐに具現化できる場所
- ・体感できる空間

■grafの結成

異業種のメンバーが揃い、企画、生産から販売までを考えられる環境を必要とし、grafは結成された。プロダクトデザイナー、クリエイティブディレクター、アーティスト、大

工、家具職人そしてシェフ。衣食住を兼ねる、暮らしを考える集団としてスタートした。

今考えれば、きっかけは些細なことである。バブル期のデザインに対しても違和感を覚えていた。ギラギラと刺々しいデザインの装飾ばかりが目を引き、本質が揺らいで見えていた。まさに衣のデザインだった。ヒトが扱う道具としてデザインされているのか？ すべてはグロテスクにさえ見えていた。

今のモノから離れ、骨董や中古家具など何か温かみのある質感、少し鈍くさいディテールのモノ、アンバランスな形状、壊れかけのモノに手を入れて修理をしたり、ブランドではなくアノニマスなモノ、いわゆるスタンダードだったり……。これだけ聞くと少し年配の趣味のようだが、バブル期の反動と言って良いのかもしれない。手触り感を求め、モノの生まれ方にこだわり、長く使える道具として回りのモノを眺めていたような気がする。そんな経験が、大きなきっかけになったのではないと思う。自分たちのこれから先の生活に必要な、フィットするモノ。道具として使いこなせるモノとして、デザインを生み出したいと考えていた。そこで、手に入れた環境が現在に至っている。

大阪は中之島に本拠地を持ち、それぞれの才能を生かせる場所として存在する。サロン、カフェ、ショールーム、ギャラリーは体感できるアウトプットの場所。隣接するビルにはクリエイティブスペースとして事務所があり、その並びには、ラボがある。アイデアを新鮮なうちにカタチに換え、スタディーを繰り返しながら生まれていく。

■ハードとソフトの循環する仕組み

モノづくりに必要な環境として、もう一方に必要なこと。ハードとソフトの循環。ヒトありきでモノが生まれ、モノがコトを起こす。ヒト、モノ、コトの流れで、正しく生まれる順序を考えたい。

この順番が逆さまになっていたりするケースが多いことに気づく。公共施設や商業施設などでは、建築のようなハードが構造として組み上がり、内部で起こる状況を後から補填していくようなケースが非常に多い。

ハードを使いこなすということは、内部で

起こるプログラムが稼動しソフトが満たされ溢れだした頃、ハードが次に成長していく、こんなイメージが、循環している“様”だと思う。これは建築や空間だけに言えることではなく、今、話している身の回りにあるモノや道具も同じことのように見える。使いこなしの瞬間から新しい用途を求め、生活領域が広がり、新しい機能を必要とする。

さて、そのきっかけとなるのはどんなコトなのか？ 例えば、アートのような極めてパーソナルな表現は、すべての人々に向けられている訳ではないだろう。感覚が響き合う相手がその観覧者になる。響き合うということは、感覚を触発し、今までの世界とは全く違う世界へと導き、共鳴し、発見をも生む。

例えてみると、背中を丸めた青年がヤクザ映画を見に行く前と見に行った後の違い。映画に出てくるヒーローが勇気を与え、高揚した気分は体質までも変える。そんな彼は、映画館の扉を開け先ほどの世界に飛び出すと、訪れたときとは違い背筋をピンと伸ばし、肩で風を切りながら、タバコをプカーッと吸っている。そんな世界の見え方の違いにソフトの力を感じる訳だ。固定概念や自分の視点を変えることで、目の前のモノが新しく見えると、モノ自体に刺激を求めなくても、ヒトの思考が働き、循環が始まるのではないのか？

ヒトがモノにかかわって以降、それを使いこなしたり、モノを更新するコトの在り方が、ハードとソフトの循環する仕組みになっていくのではないのか。両方向に力を入れてかかわっていき、モノづくりの環境として成立するのだと思う。

■隙間

では、そんな建築や空間、道具とは何なのか？

デザインコンシャスなモノ、ヒトがかかわりにくいモノ。100%デザインされたモノは、ヒトが触った瞬間から手垢が付き、輝きを失い、曇りガラスのように、元あった美しさが半減していく。これもイメージ的な話だが、かかわることによって、モノの価値が下がっていくようなモノ。

しかし、例えば80%にデザインされた手触り感のあるモノだとする。ヒトがかかわれる隙間が残っているようなモノ。風化はするがドンドン味が増し、角が取れ、美しい艶やかな丸みと重みを感じるモノになる。ヒトがかかわるコトで、その隙間に思い出や経験を共有する大切なモノになっていく。

これが、むしろ80%をデザインしているのではなくて、残りの20%をデザインしているとしたら……。これは、ヒトがかかわれる隙間をデザインしていることになる。

作り手にとっても、想像を超えることがある。隙間を満たし100%を超える使い手が出てきたとすると、新しい機能を考えるコトができたり……。新しい価値までが生まれていくのではないだろうか？ そんな、モノの生まれ方を次に考えていきたい。

■原理として

環境にも通じることがあるのかもしれない……。生まれ方のプロセスもまた重要だ。

コンセプトはどうか？ よく議論にな

る。コンセプトが良ければ、それだけで完成なのか？ 周りでよく聞くコンセプトとは、ビジネス用語のように最近では聞こえてくる。デザインを可視化し形状を伝えても感覚で捉えられないヒトのために、わかりやすい言葉を添えているかのように、そんな言葉にさえ感じられる。大きな組織や仕組みの中でコミュニケーションに必要な言葉として。もしくはコマーシャル、マーケティングに必要な要素として。

しかし、本来はそのようなコンセプトという共通言語で語られるモノではないはずだ。いかにもストーリーを後付けするような感じの、奥歯に何か挟まった……。マーケティングからくる形状に落とし込まれたモノ。そのモノの機能からくる生まれ方ではないもの。

正しいことをスポイルする。アイデアが一番ピュアーな段階からどんな経路で正しく生まれるか？ これが原理の考え方だ。

生まれる過程をいかに正しくするか？ 段階を追ってアイデアフローを見つめること。始まりと終わりの経路をたどる。

それは、やはりきっかけなのだ。始まりが何であるか？ デザインのデザインという言葉があるように、どんなメンバーでどんな環境で何が生まれるか？ そこから始めるモノなのだ。

そこにある、問題点をどのように解決するのか？ デザインの可能性を原理から探ること。暮らしの中に沢山のきっかけが潜んでいる。

原理を知ること。正しく生まれるきっかけなのだ。
(はっとり しげき)



撮影/下村写真事務所

graf:decorativemode no.3 design inc.

スペースデザイン、家具、照明、グラフィック、プロダクトデザイン、アートから食に至るまで「暮らしのための構造」を考えてモノづくりをするクリエイティブユニット。既存のものにとらわれない自由なデザイン展開で、多方面にわたり活動中。大阪を拠点に、ロンドンオフィス、東京プランチも展開している。

明治から昭和の初期に建てられたいわゆる近代建築。その評価はここ数年で見直され、一般的にも大人気となったが、次々と壊されて数少なくなるまでの長い間、ほとんど顧みられなかった。人知れず同じ道を辿り、それ以上のスピードで数を減らしてゆく戦後のビル、一般には「ただの四角いビル」と思われている建物に大注目するメンバーがある日集まった。各々が魅力を感じるビルを語るうちに、この興奮を広く伝え、空室が目立つそんなビルたちを活用する機運を高めようと、昨年秋に「ビルマニアカフェ2008」なるイベントを開催、二日間で350名もの人を集めた。集まったのは主に若い女性だ。戦後のビルと同時代を生きた世代には意外かもしれないが、彼女たちは階段の手摺を見てカワイイといい、釉薬タイルの艶に惹かれ、オリジナルのサインをカッコイイという。決して懐古趣味ではない。若い感性でビル建築に新しい魅力を見いだしているのだ。ミッドセンチュリーの音楽やファッション、家具や雑貨をこれまで再評価してきたように。

その魅力の秘密は、新しく始まろうとする時代に特有の輝きと熱気、そしてそこに漂う泥臭さのようなものであることにわたしたちは気付いている。どれも昨今の容積率目一杯に、コストを限界まで抑えてつくられる建物にはないものだ。設計者の腕の見せどころは工期やコストや建築基準法の改悪に追い詰められ、かつてのように建築は、施主の気概や建築業界の心意気を世に示す存在ではなくなってしまったようだ。

まちづくり活動に 取り組む人々。

02

ビルマニアカフェ

岩田雅希 (いわた まさき)
高岡伸一 (たかおか しんいち)
阪口大介 (さかぐち だいすけ)

このまちが好き



I love my town

かつて未来の都市に明るい希望を持ち得た時代のデザインは、今見ても未来的だ。金属パネルを多用したメタリックな外観に、角が丸い窓サッシ。プレキャストの外壁ユニットが反復する外観には、当時のSF映画のイメージが重なる。それはアルミサッシやタイルなど、あらゆる建材が工場生産の大量生産品に置き換わっていく時代でもあったが、開発初期の既製品はまだどこかぎこちなく、手づくりの跡さえ感じさせる。実際のこの時代のビルは一般のイメージとは大きく異なり、工芸的というか、よく見ると至るところが手づくりだ。3次元にひねりながら昇る木製の階段手摺と支柱の細工。窓を飾る金属格子や壁面のユニークなサイン。大理石の代替品として使われたテラゾーなど、人件費が今ほど高くなかったこの時代、現場の職人はさまざまな工夫と手間をかけてビルを仕上げていった。それがわたしたちを魅了する。

少し前に不動産ミニバブルがあり、「安く建てて高く貸す」ためのビルの竣工が相次いだ。ただでさえ床が余っているこの時代、当然貸しビルの集客は苦戦している。結局は古いビルと変わらない賃料で募集されているのを目にするが、その多くは1950～70年代のビルを壊して建てられた。高度成長期のビルの魅力が、今後社会の中心となっていく20～30代の層を惹きつけ、受け入れられているという実感を、わたしたちは活動を通じて感じている。これらのビルを活用しない手はないのだ。今までの、新しいものを良しとする価値観が確実に変わり始めていて、古さの中に良さを見出す人は今後更に増えていくだろう。魅力的なビルの空室が、オフィスはもちろん、住宅や宿、お店として个性的に使いこなされるイメージがわたしたちにはある。「ビルは友を呼ぶ」とは活動を通じて得た格言である。まだビルが数多く残る今のうちに、この価値観をもっと多くの人たちと共有したい。

高岡伸一 (1970年生。高岡伸一建築設計事務所主宰、大阪市立大学都市研究プラザ特任講師)、阪口大介 (1979年生。宅地建物取引主任者)、岩田雅希 (1972年生。設計者として株式会社アートアンドクラブに所属) のユニット。この3名ほかのメンバーでビルマニアカフェ実行委員会を主宰。揃って1950～70年代のビルの価値を高めるべく情報発信に着手、昨年10月堀江にある西谷ビルにてビルマニアカフェ2008を開催。

大阪ビルディング

安達 英俊

再読

関西近代建築

モダンエイジの建築遺産

所在地／大阪市北区中之島3-6-32
設計／渡邊節（渡邊建築事務所）
施工／大林組
竣工／大正14年9月（1925年）
構造／鉄筋コンクリート造
規模／8階地下1階建
種別／ビルディング

実際、この通りほど、交り気のない俸給生活者を、一時に吐き出すところもすくなからう。

大阪ビルは目下のところ、大阪における大建築の最高のもの、（中略）、試みに田蓑橋の上に立って夕暮れの時、ここに都会風景を織り出すところの若きインテリの歩みを見給へ。

（『近代大阪』北尾鏡之助より）

■大大阪のオフィスビルのはじまり —大阪ビルディング—

武田五一（1827—1938）は、中之島から堂島川を下るにつれて変わっていく橋の美を、橋の水平線と、垂直に伸びる建築群と対比して語っている。今日、河岸に次々と新設される高層ビル群と、既存の橋のバランスが損なわれている感否めない。

大阪ビルディングは、堂島川に架かる美しい橋の一つ、田蓑橋（1929年完成）の南東、大阪帝国大学（現大阪大学）医学部の向かいの場所に、大正14年（1925）9月、その雄姿を現した。

大阪商船（出資金150万円）・宇治川電気（同100万円）・日本電力（同50万円）の3社は、大阪ビルディング株式会社を大正12年（1923）10月9日に設立した。

その本社ビルの設計を、渡邊節（1884—1964）に委ねる。大正13年4月の着工であり、近代オフィスビルの幕開けを飾るものである。

この前年9月、関東大震災が東京を壊滅状態にし、第1次世界大戦後の好景気にわく多くの企業は、大阪にその事務所を求めた。

延床面積33,498.81㎡（10,132.73坪）のRC造8階（地下1階）建ビルである。

大阪商船がここに本社を置く。サラリーマンが俸給生活者と言われていた時代である。

渡邊事務所も、竣工時より昭和18年に至るまで、このビルにて事務所を構えていた。

渡邊は、ロマネスク様式・ルネッサンス様式を加味したモダン建築を意匠した。平面計画は、合理的であり、構造・設備に最新の技術を駆使して、都市建築を現出する。

2つの中庭は吹き抜けとなり、各室に、光と風を運ぶ。

大正14年（1925）11月発行の『建築と社会』（第8輯11号）の巻頭に、竣工写真と平面図により紹介されている。（次頁参照）

また巻末には、大阪ビルディング新築工事概要として、記載がある。

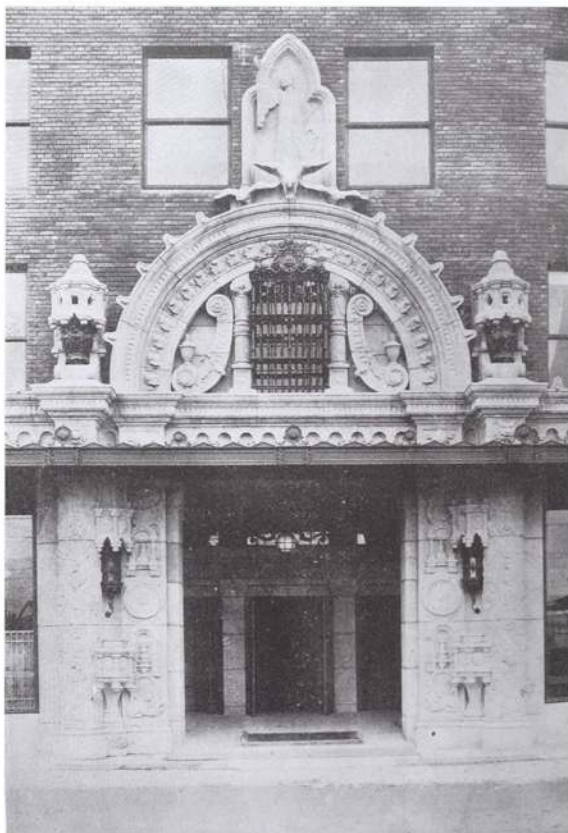
概要は、当時の用語を用い、要約すると、

「17ヶ月して其全工事を終へたり、内国生産品を蒐め、絶対耐震耐火の構造とし、其の内外の装飾は簡素を旨とせしも其要部に於いて放膽なる意匠と自由なる彫塑をもって豊かならしめたり。総延坪は約10,000坪を算し、其大きに於いては実に関西第一と称すべく而も諸般の新設備に至りては未だ他に比肩するもの或は類例とすべきものあるを聞かず」

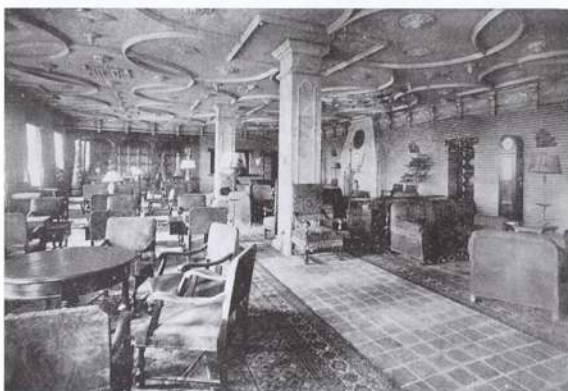


①ダイビル（現在）

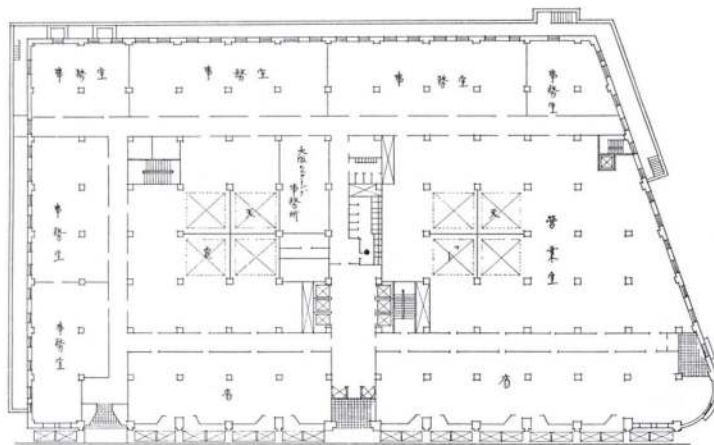
堂島川越しに、中央にダイビル、南側（写真右側）に関西電力ビル、東側（同左側）に中之島ダイビル、の高層ビルが林立する。



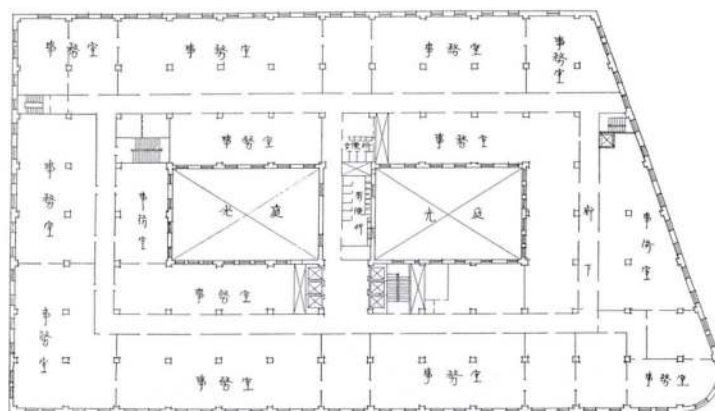
②北側正面玄関口の詳細
ロマネスク風のアーチと、タブレット、そしてピラスター。



③大阪ビルディング倶楽部内部
8階の倶楽部のインテリア。
天井の意匠に注目。



④1階平面図



⑤2～7階平面図



⑥大阪ビルディング食堂内部
8階の食堂。家具・調度の美しさは秀逸。



⑦北西の外観
北西のコーナーに入口があり、7階上部にて、いったん水平に切り、コーンの簡素さで、優雅なスカイラインを形成する。

「建築と社会」第8輯11号（大正14年11月号）より

⑧大阪ビルディング
東京分館第1号館
1階部のアーチや、
ボツ窓に、「大阪ビル
ディング」の建築言語
がみられる。
〔渡邊節作品集〕より



⑨大阪ビルディング
東京分館第2号館
垂直線を強調した、ゴ
シック風のファサード。
〔渡邊節作品集〕より



⑩田菱橋畔に建つ
大阪ビルディング
竣工時の大阪ビルディング。
堂島川の護岸に、水都大
阪が読み取れる。
〔渡邊節作品集〕より



⑪ダイビルの正面玄関部（現在）

⑫新旧ダイビルと中之島ダイビルの北側ファサード（現在）

⑬ピラスターの柱頭部詳細（現在）

⑫

⑬

〈用途〉

- 1階／大阪商船・銀行3行・郵便局
- 2、3階／大阪商船
- 4階／宇治川電気
- 5階／渡邊建築事務所・大阪陶業・貸事務所
- 6階／大阪鉄工・貸事務所
- 7階／日本電力
- 8階／英国領事館・倶楽部食堂他
- 地下室／電気室・機械室・貸書庫・貸倉庫

〈外観〉

近世式にして特殊の手法を施し1階正面は龍山石を用い之れに自由なる彫刻を加へ2階以上及側面は全部特殊の耐震装置により特製「タペストリブリック」を以て積上げ軒部は「テラカッタ」積とす。

〈設備〉

- ・大井戸／地下室に径14寸深400尺の大井戸により一昼夜29,000石の地下水を揚げ以て空気洗浄、冷却に使用。断水の憂なし。
- ・暖房／蒸気式とし各室に放熱器を配置す。
- ・昇降機／人員用6基・荷物用1基、人員用は、急行と普通に区別し、尚乗客の繁閑を計り変更して混雑を防ぐ。
- ・その他／温度調節器・真空掃除機・メールシュト・防火消火装置

〈設計スタッフ〉

- ・構造設計／内藤多仲
- ・設備設計／北浦重之、関藤仁介
- ・製図主任／村野藤吾
- ・施工／大林組（現場主任・谷口、永野）

近代建築にロマネスク様式を加味した「ボツ窓」で全体を意匠する。コーナーのアル面は、2本の垂直のラインにより、心地よいリズムを醸す。外装のスクラッチド・タイルと東洋風・スパニッシュの細部は、美しい調和をみせ、北正面は、ロマネスク風のアーチ、鷲に乗った少女の彫刻（大國貞蔵作）（タブレット）がある。

村野藤吾は、生前、「このビルが解体される日がくれば、この彫刻だけでも保存してほしい。」と語っていた。

簡素な軒蛇腹（コーニス）、重厚な左右6本の片蓋柱（ピラスター）の装飾は、建築全体としてよいバランスを保っている。

施工においても、吊足場等の新技術を駆使し、工事費を300万円（当時）より200万円の2／3にした。この内、約30％が設備（蒸気暖房・井戸水冷房等）に使用されたのも注目に値する。これらは、施主側経理担当の岡田永太郎に負うところが多いと、渡邊は後日語っている。実費精算方式である。今日は施工側が行う、工程管理、材料調達、現場積算を渡邊事務所が行い、コスト減により、その

一部を報奨金として受け取るのである。

テラコッタ、プラスター、エレベーター、衛生器具、防火扉等国産品を多用して、建築業界に新風を吹き込んだ。

■建築家、渡邊節

渡邊節は、明治17年（1884）に東京府に生まれ、明治41年（1908）東京帝国大学（現東京大学）を卒業している。

その卒業設計は、見事な「帝国議会議事堂案」（A HOUSE OF PARLIMENT）である。これが、彼のその後の建築家としての運命を左右し、関西において活躍する遠因となるのである。その案は、議事堂設計を画策していた辰野金吾の逆鱗に触れ、敵対する妻木頼黄の推挙により、朝鮮総督府を経由して鉄道院に勤める。

明治45年（1912）7月、明治天皇の崩御により、京都における大嘗祭のため、急遽、京都駅の駅舎設計の責任者として赴任する。

彼は、ゼツツシオン様式の2代目京都駅を完成するが、工期の関係により、多くの部分を木造としたこともあり、昭和25年（1950）、惜しくも失火により、焼滅する。

京都駅の竣工を見届けた渡邊は、鉄道院を辞し、大正5年（1916年）、事務所を大阪と東京に開設し、翌々年、7歳下の村野藤吾（1891—1984）を所員として迎える。意匠・構造・設備と多くの才能ある所員と新しい建築をめざす外部顧問たちにより、多々の名建築を実現させる。

■大阪ビルディング東京分館第1号館・第2号館（非現存）

東京駅前には、この2つの建築は、かつて存在した。

イタリア、13世紀のパラッツォ・ヴェッキオ（フュレンツェ）を彷彿とさせ、コーニスには、125匹におよぶ獣面と鬼面のグロテスク（獣面装飾）がファサードを飾る1号館（1927年）、片や、1号館に隣接し、渡廊下で結ばれた、異なる様式ゴシック様式を模した2号館（1931年）である。

■大阪ビルディング新館

昭和13年（1938）、本館の東側に、新館が竣工する。東京分館1、2号館と同じ配置をもつが、様式は変えることなく、本館を継承するように、高さや窓割に配慮された。外壁のタイルは、茶色と白色と対比を見せる。

玄関ホールは、アール・デコスタイルのステンレス意匠が、美しい。

塔屋は、国会議事堂のジグザットの様相を呈し、渡邊節は、30年前の卒業設計を想い、

この意匠としたと仄聞する。

■中之島の現風景

渡邊節は、大ビル竣工2年後、昭和2年（1927）7月発行の『建築と社会』（第10輯7号）にて、建築教育について、次のようなコメントを送っている。

「遠い四千年前のエジプト時代から、十九世紀の終りのルネサンス時代までに、幾多の天才技術者に依り洗練された建築のスタイルと云ふものが、一朝一夕にして破壊せられるものではないと思ふ。」

「市街の中央に西洋の棺桶を大きくしたやうなものが出現したり国民の血税を搾って集め得たる政府の金に依って造られる建築に、無用な、寧ろ醜怪なる装飾が付いていたり、永久的の建築に僅か十年位の寿命しかないやうな材料を使用したり、一時の流行に過ぎないやうなスタイルを真似たりするようなことは、お互い憤まなければならないことではないだろうか。」

都市を構成する建築美は、半世紀程度を経て、生活する人々がどのように感じるか、と評価を得るのである。

かつての建築群を解体して新しい建築を創る人は、渡邊の論ずるように、過去の建築史を踏まえたうえで、それ以上の優れた建築を創るという覚悟がいるのは、自明である。それが、建築家の責務であると考える。

ダイビルは、本年秋から末に解体され、公開空地及び新しい事業ビルとなる予定である。東隣に建つ「中之島ダイビル」（その玄関に付した様式のレプリカを含め）は、渡邊が、いみじくも、82年前に語ったこととならなければよいのだが。

多くを語るまい。

「時代を、都市を、体感する感性を研ぎ澄ませよ。」

休むことなく……。

参考文献

- ・『建築と社会』大正14年11月、昭和2年7月
- ・『新建築』一渡邊節氏作品号—昭和4年9月
- ・北尾鯉之助『近代大阪』創元社、昭和7年
- ・中村勝哉編『渡邊節作品集』波紋社、昭和7年
- ・『ひろば』昭和41年5月
- ・安達英俊「様式から表徴へ」『村野藤吾建築設計図展カタログ』平成16年

（あだち ひでとし／安達英俊建築研究所）

神戸市建築物安全安心 実施計画(第3次)の策定

浅野高史

神戸市都市計画総局参事(安全対策担当)

計画策定の経緯

神戸市では、平成11年度に、建築関係団体及び関係機関の参画を得て「神戸市建築物安全安心推進協議会」を設立し、安全で安心なすまい・まちづくりを促進するための総合的な実施計画である「神戸市建築物安全安心実施計画」(平成11～15年度)を策定した。引き続き平成16年度に、「新神戸市建築物安全安心実施計画」(平成16～20年度)を策定し、完了検査の完全実施や違反建築物対策等に取り組んできた。

その結果、完了検査率については、平成10年度の44%から、平成19年度確認分で98.5%へと、著しく向上させることができた。また違反件数も、第1次計画期間平均で年間約150件という状況だったが、第2次計画期間平均では年間約60件と半分以上にまで減少している。

第3次計画の策定

平成21年3月26日に開催された「神戸市建築物安全安心推進協議会」の総会で、現行の「新神戸市建築物安全安心実施計画」が終了することに伴い、引き続き第3次計画(平成21～25年度)が策定された。

第3次計画では、これまでの計画で取り組んできた施策の検証・評価を踏まえ、引き続き取り組んでいくことが必要な課題及び「耐震偽装問題」「アスベスト問題」「カラオケボックス・個室ビデオ店火災」「自動回転ドアやエレベーター・エスカレーター事故」「遊戯施設事故」等最近の建築物にかかる事件・事故への対応策を示し、建築物の安全性確保のための施策を総合的に推進することにより、「日本で最も安全なすまいのまち“神戸”」の実現を目指す。

第3次計画の目標

完了検査率の目覚ましい向上や違反建築の

減少など、これまでの計画推進の成果として、新築建築物の流通時点においては、おおむね適法な建築物が供給されるようになったと思われる。

第3次計画では、従来の計画の成果を引き継ぐとともに、建築物が供給後も適正に維持・管理されるためのストック対策が重要であるという認識のもと、次のような目標を設定している。

(1) 定期報告制度を活用した既存建築物の適正な維持管理を推進するため、定期報告制度の周知・啓発及び未報告物件に対する指導の強化を行い、平成25年度までに報告率90%とすることを目標とする。

(2) 不特定多数の市民が利用する小規模な飲食ビル等について、従来、防災面の指導を強化してきたが、今後5か年で約1,000棟を対象に違反の有無を調査し、是正を指導する。

(3) 新築建築物について、建築確認の適正な実施及び完了検査の完全実施を目指す等、法手続きの適正な執行を促進し、違反建築の未然防止に努めるとともに、違反建築の早期発見・早期是正に努める。また、昇降機等の事故の未然防止対策を進める。

(4) 神戸市耐震改修促進計画の着実な実行により、建築物の耐震化を促進し、平成27年度までに、耐震化率を住宅全般は95%、市営住宅は92%、耐震改修促進計画が対象とする民間建築物は90%、同様に公共建築物は100%とすることを目標とする。

(5) 市民及び建築関係業界に対する広報及び知識の普及を図る。特に、市民との協働による安全安心なすまい・まちづくりの推進のため、「神戸市建築物の安全性の確保等に関する条例」に定める市民の基本的責務につい

て理解を深めることができるように広報・周知に積極的に取り組む。

定期報告率

年 度	H11～H13	H14～H16	H17～H19
対象件数	4,024	4,994	5,417
報告件数	2,820	3,881	4,253
報告率	70%	77%	78%

おわりに

かつては、安全安心な社会の構築のためには適法な建築物が流通し、それらが適正に維持管理されることが不可欠であるという認識が、あまり市民の中に根付いていない現状があった。

しかし最近では、阪神・淡路大震災を教訓として、建築物の耐震化の促進が不可欠であることが広く市民に知られるようになり、また先年のクボタのアスベスト問題を契機として、アスベスト対策の必要性の認識も深まっている。

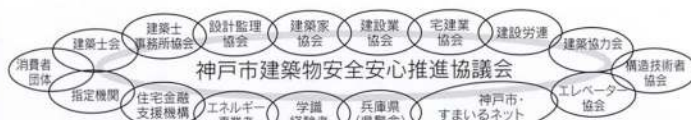
一方、姉歯事件に代表される耐震偽装問題や各種建材の性能偽装など、建築行為そのものの信頼の確保が大きな課題となっている。

さらに、カラオケボックスや個室ビデオ店等火災、エレベーター・エスカレーター事故など、日常生活に潜む危険防止対策も重要である。

今回新たに策定された「神戸市建築物安全安心実施計画(第3次)」を活動の指針として有効に活用し、行政及び建築関係団体並びに関係機関の連携により、安全で安心なすまい・まちづくりを推進していきたいと考えている。

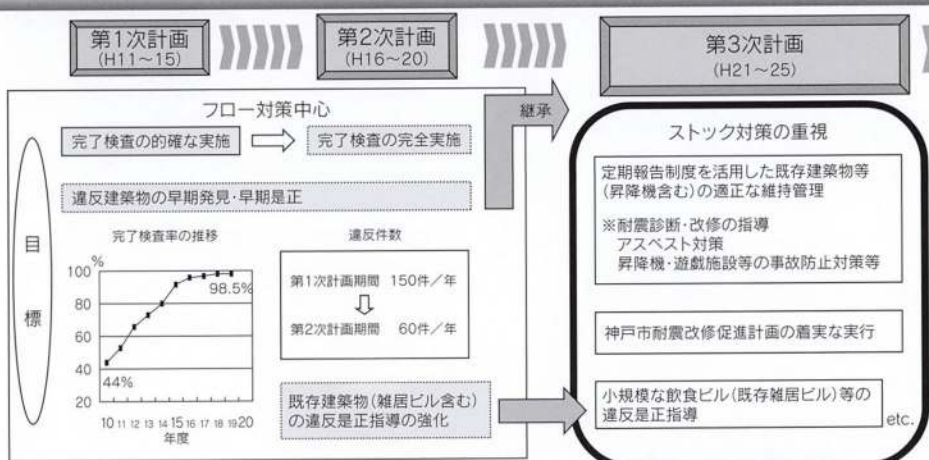
(あさの たかし)

神戸市建築物 安全安心実施計画 (第3次)の策定



協働と参画による

「日本で最も安全なすまいのまち“神戸”」の実現



波形鋼板耐震壁

—軽く、粘り強く、しなやかに、
地震に抵抗する壁—

池田英美

神戸中工務店大阪本店設計部

近年、建物には、地震時の安全性確保や建物の損傷低減などの基本的な機能だけでなく、眺望の確保や空間の有効利用といった付加価値が求められている。そのような建物を実現するための技術の一つとして、高性能な鋼製耐震壁である「波形鋼板耐震壁」(特許出願中)とスリムな柱を組み合わせた「スーパースリムストラクチャー」を開発した。

波形鋼板耐震壁の概要と特長

波形鋼板耐震壁は、鋼板をデッキプレート状に折り曲げた波形鋼板と周辺の柱・梁フレームから構成される新しい耐震壁である(写真1)。長期荷重は柱・梁フレームが負担し、地震などの水平荷重に対しては主に波形鋼板が粘り強く、しなやかに抵抗する(図1)。鉄筋コンクリート耐震壁と比較すると、軽量であり、変形性能、地震エネルギー吸収能力に優れているため大地震時における軀体の損傷を低減できるとともに、柱や梁などのスリム化が図れるため、内部空間の自由度が向上する(表1)。

周辺の柱・梁フレームは、鉄筋コンクリート造だけではなく、鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造などの構造種別に対応可能である。

波形鋼板耐震壁の特長は、以下の通りである。

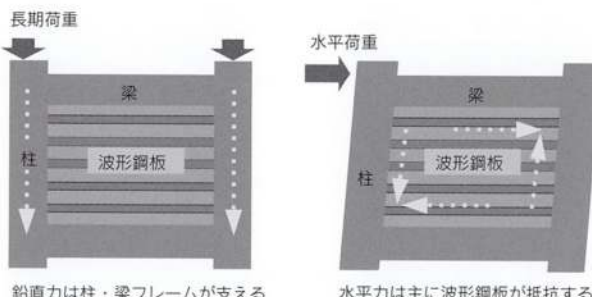
①構造部材のスリム化などにより、内部空間の自由度が向上する②鋼板の厚さ・強度により、水平剛性・耐力の調整が容易である③高いエネルギー吸収により、軀体損傷を低減できる④狭い場所にも設置が可能で、有効床面積が増える⑤必要保有耐力(DS値)等が規定されており、保有耐力計算が可能である。

〔仮称〕肥後橋MIDビルでは

本建物は、大阪市西区に計画された地下1階、地上11階建てのオフィスビルである(2010年1月竣工予定)(図2)。構造形式は、鉄骨造のラーメン架構に波形鋼板耐震壁(制



写真1 波形鋼板耐震壁



鉛直力は柱・梁フレームが支える

水平力は主に波形鋼板が抵抗する

図1 波形鋼板耐震壁の性質

表1 鉄筋コンクリート耐震壁と波形鋼板耐震壁の比較

比較項目	鉄筋コンクリート耐震壁	波形鋼板耐震壁
地震時の変形性状		
内部空間の自由度	○ 普通	◎ 高い(構造部材のスリム化など)
重量	△ 重い	◎ 軽い
エネルギー吸収能力	○ 普通(鉄筋の引張降伏)	◎ 高い(鋼板のせん断降伏)
開口部の設置	△ 困難	○ 可能
剛性・耐力の調整	△ 困難	◎ 容易

図2
建物外観



図3
基準階平面図

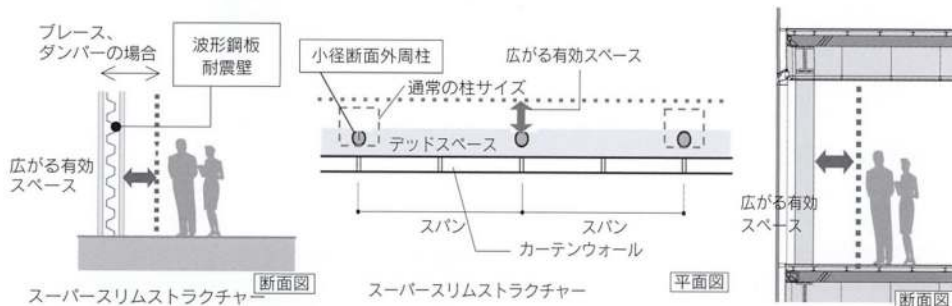
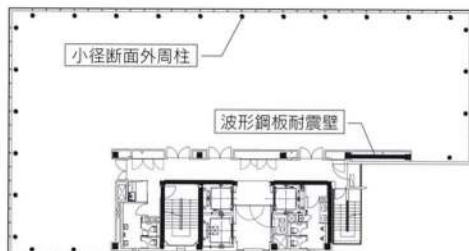


図4 耐震要素の有効スペース

図5 外周柱の有効スペース

振壁)を配置した制振構造である。波形鋼板耐震壁を各階のコア廻りに配置することにより、外周の柱を小径断面とし、開放的なオフィス空間を実現している(図3)。

波形鋼板耐震壁は、従来の制振ダンパー等と比較して、壁厚さが極薄となるため、狭いスペースにも設置が可能であり、オフィスの有効面積を大きくすることができる(図4、5)。波形鋼板耐震壁は下層基準階でXY両方向とも3ヵ所に配置し、鋼板の厚さは3.2mmであり、地震時層せん断力の約50%を負担している。また、性能確認のために行った時刻歴応答解析においては、履歴特性から計算した大地震時の等価粘性減衰定数(heq)

が20%以上となり、高い地震エネルギー吸収能力を確認できた。

本建物では、スーパースリムストラクチャーの採用により、オフィスの有効面積が大きく、かつ安心安全な建物を実現できた。

今後の展開

現在、波形鋼板耐震壁は、計画中を含めて約10件の建物で採用されており、その有効性が確認されている。今後、形状の規格化、鉄骨ディテールの簡易化等によって、より安価で高性能な耐震要素を、様々な用途の建物に適用していきたいと考えている。

(いけだ ひでみ)

▶ 第5回 日本建築学会近畿支部環境保全部会 公開研究会

今回の公開研究会では、小浦久子氏（大阪大学准教授）による、新たに決定した芦屋市の景観地区とその運用における景観協議の考え方についての講演を行う。地域特性を継承し育むような地域での変化の折り合いについての景観政策の観点から考える。

日時 2009年 5月19日(火) 18:30~21:00

会場 大阪市立大学文化交流センター大セミナー室（大阪駅前第2ビル6階）

講演 「地域コンテキストの共有化をめざす景観協議」

講師 小浦久子氏/大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授

料金 500円（資料代）

定員 36名

申込み・問合せ先：大阪大学大学院工学研究科（伊丹康二/環境保全部会幹事）

e-mail: itami@arch.eng.osaka-u.ac.jp

【大阪府知事賞】
なんばパークス



【大阪市長賞】
天満天神繁盛亭

▶ 平成21年度ファシリティマネージャー資格試験

試験日/2009年 7月5日(日)

試験会場/大阪・東京・札幌・名古屋・福岡

受験申込み/2009年 4月1日~5月26日

受験申込み用紙は<http://www.jfma.or.jp>から。

* 5月11日用紙請求締切り。

合格発表/2009年 9月1日

務店)

【大阪府建築士会長賞】 地域生活支援センター光（事業主：聖ヨハネ学園 設計：NTTファシリティーズ 関西事業本部）

【奨励賞】 児童養護施設あおぞら、北摂池田メモリアルパーク、淀屋橋odona、ブリーゼタワー

▶ 医療福祉建築賞2008受賞作品

2008年度は、30点（病院16点・診療所3点・福祉施設11点）応募の中、以下のように決定した。

■愛和病院（開設者：医療法人愛和会 設計：仙田満+環境デザイン研究所・大成建設一級建築士事務所 施工：大成建設 所在地：埼玉県川越市古谷上983-1 竣工：2007年3月）

■公立阿伎留医療センター（開設者：阿伎留病院組合 設計：久米設計 施工：清水・東急・清水組・五光・クリエート特定建設工事共同企業体 所在地：東京都あきる野市引田78-1 竣工：2006年3月）

■岡山県精神科医療センター（開設者：岡山県 設計：日建設計・倉本建築設計事務所設計共同体 施工：蜂谷工業・小倉組建設工事共同企業体 竣工：2006年1月 所在地：岡山市鹿田本町3-16）

■特別養護老人ホーム あさひ苑（開設者：社会福祉法人愛心会 設計：コスモス設計 施工：前田建設工業 竣工：2006年11月 所在地：愛媛県宇和島市三浦西4979）

■のぞえ総合心療病院（開設者：医療法人コ

▶ 第28回大阪都市景観建築賞・第15回大阪・心ふれあうまちづくり賞決定

■第28回大阪都市景観建築賞

【大阪府知事賞】 なんばパークス（建築主：南海都市創造・高島屋 設計：大林組・日建設計・ジャーディパートナーシップ 施工：大林組・竹中工務店）

【大阪市長賞】 天満天神繁盛亭（建築主：上方落語協会 設計：株野忠正建築研究所 施工：銭高組）

【大阪府建築士会長賞】 大阪弁護士会館

【緑化賞】 プール学院中学校・高等学校

【奨励賞】 史跡 旧堺燈台、かね善本社ビル、公益社 千里会館、追手門学院大学中央棟・6号館、桃坂コンフォガーデン（Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ）

■第15回大阪・心ふれあうまちづくり賞

【大阪府知事賞】 阪急山田駅及びデュー阪急山田（事業主：阪急電鉄 設計：アーバン・エース）

【大阪市長賞】 梅新第一生命ビルディング（事業主：第一生命保険相互会社 設計：竹中工

ミュノテ風と虹 設計：環・設計工房 施工：
大林組 竣工：2005年4月 所在地：福岡県久
留米市藤山町1730) ■熊本県こども総合療育
センター（開設者：熊本県 設計：日建設計
施工：高橋建設 竣工：2005年9月 所在地：
熊本県宇城市松橋町豊橋2900)

■うむやすみあす・ん診療所（開設者：医
療法人たぶの木 設計：後藤哲夫建築事務所
施工：先嶋建設 竣工：2006年7月 所在地：
沖縄県宮古島市平良字下里1477-4)

▶第3回「地域防災防犯展」大阪

本展は、企業及び地域社会に生活する人々の
生命の「安心・安全」を守ることをテーマと
し「防災・減災・防犯」に関わる展示及びセ
ミナーをもって関連する製品、技術、情報等
を網羅する総合イベントである。出展申込み
は下記ホームページで。

会 場 インテックス大阪（大阪南港）

日 時 2009年6月4日（木）・5日（金）

http://www.fair.or.jp/risk/

▶2010年JID賞ビエンナーレ

JID賞は、デザイナーや企業等の優れた活動
成果を表彰して日本のインテリアデザインの
質的向上を図り、豊かな社会と文化の発展に
寄与することを目的としている。

■賞：大賞（1点）インテリアスペース賞（3
点）インテリアプロダクト賞（3点）インテ
リア研究・著作・業績賞（1点）新人賞（数
点）佳作（数点）

*入賞者には賞状若しくは盾の授与

■審査結果発表及び表彰式：審査結果は入賞
者に知らせる（2009年11月下旬）。表彰式及
び展示は2010年1月頃予定。

■応募受付期間：2009年5月1日（金）～6
月30日（火）17:00必着

■応募対象：2007年4月1日～2009年3月
31日に日本国内で完成・発表されたスペ
ースデザイン、プロダクトデザイン。

■応募資格：個人またはグループ。国籍は問
わない。

■応募方法：応募料は1点につき3,000円で
何点でも応募可。A4版ファイル（縦使い）
に簡潔にまとめ応募票と一緒に送る。図面・
写真等の視覚的資料、掲載文献・著作物など
を主旨や概要書とともに自由にまとめる。研
究・著作・業績の場合、主旨・説明文は400
～800字とする。

■審査員：特別審査員/下川一哉（日経BP社
日経デザイン編集長）原 研哉（グラフィッ
クデザイナー（予定）酒井正人（JID理事長・
インテリアデザイナー）JID選考委員会/岩

倉榮利他7名

■応募送付先：（社）日本インテリアデザイナー
協会事務局「JID賞」係/〒163-1008東京都
新宿区西新宿3-7-1新宿パークタワー 8F

■ TEL.03-5322-6560 FAX.03-5322-6559
詳細についてはホームページで。

http://www.jid.or.jp

▶展示会「リビング&デザイン」

「リビング&デザイン」は、住空間を提案す
る要素に焦点をあて、ビジネスに結びつく国
際的なトレードショーとして関西で創設開催
し、今後毎年開催する。本展では、快適な住
空間とデザイン性のある家具・インテリア製
品を紹介し、ライフスタイルに応じた暮らし
を提案するとともに、デザインが創り出す可
能性を追求する。

会 期 2009年9月16日（水）～9月18日（金）

10:00～17:00 最終日は16:00まで

会 場 インテックス大阪

大阪市住之江区南港北1-5-102

出展申込み締切り：2009年5月31日

詳しくはホームページで。

http://www.fair.or.jp/living

▶人形展 託す想い、伝える心 ～（社）佐保会所蔵品を中心に～

平城遷都1300年記念プレ展示である本展覧
会は、1909年の創立から今年で100年を迎え
る奈良女子大の同窓会組織である（社）佐保会に
昭和初期に全国の支部及び会員から寄贈され
た雛人形や郷土人形や中国・朝鮮半島の人形
総点数680点を展示する。

会 期 2009年4月4日（土）～5月24日（日）

9:00～17:00（金・土21:00）



中国風俗人形（大道音曲師）

月休館（GW中は5/7（木）休館）

会 場 奈良県立美術館

奈良市登大路町10-6

TEL.0742-23-3968

料 金 一般1,000円、大高生700円、中小生
400円

問合せ 奈良県立美術館学芸員（飯島礼子）

【ギャラリートーク】奈良県立美術館学芸員

日 時 5月2日（土）・16日（土）14:00～

招待券は日本建築協会（TEL.06-6946-6981）へ。

▶特別展 「小袖 江戸のオートクチュール」

1611年、名古屋で呉服商として創業の松坂屋
は、新たなデザインの研究と意匠デザイン開
発を目的として、昭和6年、京都仕入れ店に
染織参考館を設置し、古今東西の染織関係資
料を積極的に収集し現在約1万点を所蔵して
いる。本展では、長らく門外不出であった染
織資料の中から、江戸時代初期から後期まで
の豪華な小袖の数々と当時流行の模様が掲載
された雛形本を中心に300点を紹介する。そ
のほか、小袖姿の女性を描いた絵画作品、蒔
絵の化粧道具も合わせて展示する。

会 期 2009年4月14日（火）～5月31日（日）

9:30～17:00（入館は16:30まで）

月曜日休館（GW中は5/7（木）休館）

会 場 大阪市立美術館（天王寺公園内）

大阪市天王寺区茶臼山町1-82

料 金 一般1200円、大高生900円、

問合せ 大阪市立美術館（TEL.06-6771-4874）

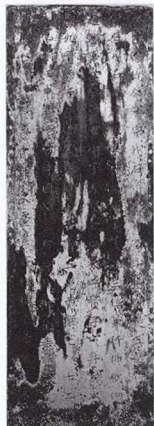
招待券は日本建築協会（TEL.06-6946-6981）へ。



格子に梅樹秋草模様帷子 江戸時代中期

▶大阪歴史博物館 特別展 蔵出し大阪歴史博物館名品展

大阪歴史博物館では、市民からの寄贈・寄託などの協力を得、現在では総数12万点を超えるに至っている。本展ではこれらの中から優品・名品を選び、国宝・重要文化財を中心として、これまで公開する機会の少ない珠玉の文化財を一挙に公開する。



石川年足墓誌
(いしかわとしりぼし)
奈良時代 国宝

会 期 2009年4月29日(水)～6月15日(月)
火曜休館 (GW中は5/7日)
会 場 大阪歴史博物館 6階 特別展示室
大阪市中央区大手前4-1-32
料 金 大人600円、大高生400円
問合せ 大阪歴史博物館 (井上智勝)
TEL.06-6946-6451
招待券は日本建築協会 (TEL.06-6946-6981) へ。

▶特集展示 「修復品・新収品お披露目展」

博物館の所蔵する資料の中には、表面の剥落やひび割れなどの破損、あるいは錆や汚れなどにより状態の良くないものが含まれる。そうしたものを修復し未来に伝えることは、博物館の重要な役割のひとつである。今回は、修復完了した資料を陳列し、博物館のもつ「修復・保存」という役割について紹介する。

会 期 2009年4月8日(水)～6月15日(月)
9:30～17:00
火曜休館 (GW中は5/7(木))
会 場 大阪歴史博物館 8階特集展示室
料 金 常設展示観覧料で可
問合せ 大阪歴史博物館 (豆谷浩之)
TEL.06-6946-6451

○主な出品物 宮島山水図花瓶 (藪明山作 明治時代)、長柄文台 (江戸時代中期)、阿波人形かしら 丸目 (人形忠作 明治時代)
招待券は日本建築協会 (TEL.06-6946-6981) へ。
ただし、特別展は別途入場料必要。

▶企画展「幽玄の美を追い求め」 ～松園・松篁の芸術観を育てた能楽～

美人画家として京都画壇に大きな足跡を残した上村松園とその息子で花鳥画の道を80年

以上に渡って歩み続けた上村松篁は共に能楽から多くのインスピレーションを得て作品を制作した。「謡曲をやっていると身も心も清浄になっていく。謡曲に描かれている事象すべては絵の題材と言ってよい」という松園。「能、謡曲が表現する幽玄の世界と私の描きたいと思う世界が一致するところがある」といった松篁。本展では、松園、松篁が能楽から影響を受けて制作した作品を紹介する。

会 期 2009年4月2日(木)～5月31日(日)
10:00～17:00
月曜休館 (GW中は5/7(木)休館)
会 場 松柏美術館
奈良市登美ヶ丘2-1-4
料 金 大人800円、中小生400円
問合せ 松柏美術館学芸課 (鬼頭美奈子)
TEL.0742-41-6666

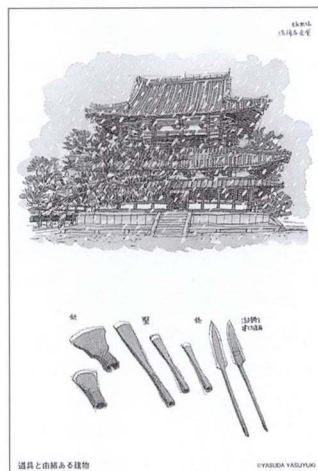
招待券は日本建築協会 (TEL.06-6946-6981) へ。



上村松篁「薪能」昭和61年 京都府蔵

▶水墨画で綴る一大工道具物語 安田泰幸展

画家安田泰幸氏は街を訪ね歩き、人々が築きあげてきた街の表情や生活の文化を、ポストカードの紙に描く活動をしている。このたび安田氏が竹中大工道具館収蔵品2百数十点をスケッチした。その絵は職人が愛用した道具の美しさやぬくもりが水墨画で表現されている。本展では、一つひとつの道具に込められた知恵と工夫の物語を、建築物や町並みのスケッチと共に楽しんでいただく。



会 期 2009年4月25日(土)～6月14日(日)
9:30～16:30 30日曜休館
(祝日の場合は翌日)
会 場 竹中大工道具館
神戸市中央区中山手通4-18-25
料 金 無料 (入館料のみ)
問合せ 竹中大工道具館 (西山マルセーロ)
TEL.078-242-0216

【安田泰幸氏】 1950年大阪市生まれ。京都教育大学特修美術科卒業。1980年頃からはがきを使ったスケッチ活動を始める。1998年お年玉年賀はがき兵庫県版、ふるさと切手に「明石海峡大橋」を描く。
絵葉書希望は日本建築協会 (TEL.06-6946-6981) へ。

▶社団法人都市住宅学会関西支部 2009年度総会記念フォーラム

タイトル「エリアマネージメントの先進事例とその課題—特区および高島平モデルから」
日 時 2009年5月22日(金)
13:30～16:30 (受付開始13:10)
会 場 大阪市立住まい情報センター3Fホール
大阪市北区天神橋6丁目4-20
会 費 無料
問合せ 都市住宅学会関西支部事務局
(TEL.06-6949-5751 E-mail: yamamoto-c@ur-s.jp)

*事前申込みなし、当日会場受付。

■プログラム

第1部 (13:40～14:10) 「特区を利用した地域活性モデルの先進事例と課題」：内閣府 上席政策調査員・服部 敦氏/中部大学教授 (14:10～14:40) 「高島平の多世代マネージメントについて」：高島平総研高島平再生プロジェクト統括責任者・山本孝則氏 (前大東文化大学環境創造学部教授)
第2部 (14:55～16:30) パネルディスカッション：①コメントタイトル「米での大学ベース型コミュニティデザインとの比較から見えるもの」近藤民代/神戸大学大学院工学研究科建築学専攻准教授②パネルディスカッション：森栗茂一 (コーディネーター)、前田雅信、服部敦、山本孝則、近藤民代、

▶東京・大阪中央郵便局庁舎の 保存問題に関する声明

新建築家技術者集団全国幹事会では、東京中央郵便局庁舎 (1931年) および大阪中央郵便局庁舎 (1939年) の重要性に鑑み、高層化計画を撤回し、庁舎全体の保存・活用を求める声明を発表した。

ここに紹介するのは、日本建築協会で入手した図書です。数多くの出版物の中ではほんの一部にしか過ぎませんが、どの本にも著者の思いと夢がこもっています。

建築

crossroads

この人がこんなテーマに取り組んでいる、このグループがああ建築人にアプローチした、そんな人物交差点になることを願って、既刊、新刊の図書を紹介します。

書棚●2008.11

コンパクトシティ再考

理論的検証から都市像の探究へ

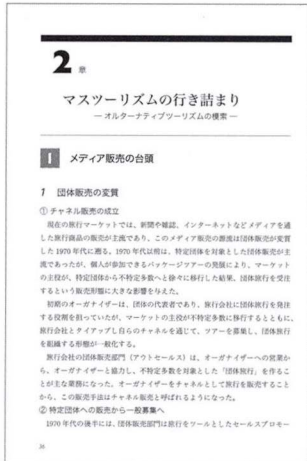


企画 首都大学東京 都市システム科学専攻
編著 王川英則
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 A5判、220頁
定価 本体価格2400円

コンパクトシティの概念的・実証的モデルと、省エネ・交通・防災・自治体の広域合併等の具体例を検証し、課題を同時に克服することが可能な都市形態を探る。

書棚●2008.11

観光学への扉



編著 井口 貢
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 A5判、256頁
定価 本体価格2300円

持続可能な観光という考え方を軸に、マスツーリズムも含めて、広くかつ体系的に観光分野を概観する。「観光学」を学ぶことが、暮らしや仕事で有用となり得ると実感できるように工夫されている。

書棚●2008.11

これでわかる！ 着地型観光



編著者 尾家建生・金井萬造
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 A5判、224頁
定価 本体価格2400円

地域資源を地域自らがプロデュースする着地型観光が注目されている。地域と観光客、旅行業者が互いに益する関係を築き、地域振興につなげる考え方と実践手法を検討した成果が、この書に結実する。

書棚●2008.12

近代日本の建築活動 の地域性



著者 李明・石丸紀興
発行所 株式会社学芸出版社 TEL082-246-7909
体裁 四六判、222頁
定価 本体価格2200円

ミニ開発・ミニ戸建てがスラム化の恐れを指摘されながらも普及した事情を分析し、最新の住宅性能や地域ビルダーの成長、町並み形成型開発を展望、低中層市街地への変革を提起する。

書棚●2009.1

景観まちづくり 最前線

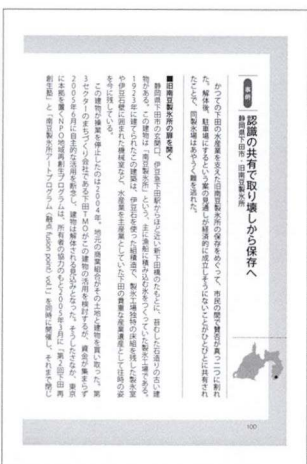


著者 自治体景観政策研究会 編
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 A5判、400頁
定価 本体価格4000円

先進的な景観計画・景観地区の25事例の背景やプロセス、こだわりどころを行政担当者が紹介する。さらに一歩進んだ景観計画の進め方を実務家・研究者が指南する。

書棚●2009.1

「まちづくり」の アイデアボックス

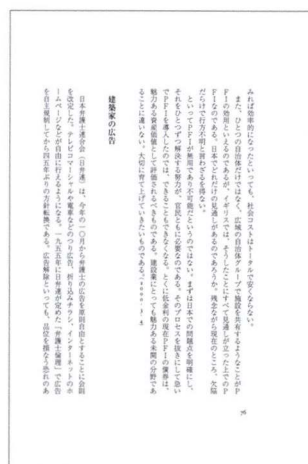


編著 橋本憲一郎、山中新太郎
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 四六判、213頁
定価 本体価格2000円

「はじめる」「つなげる」「つづける」という3つの章建てのもと、24のアイデアと事例を紹介している。たとえば、静岡県下田市の旧大豆製氷所が取り壊しの難を逃れた事例が紹介されている。

書棚●2009.1

信頼される建築家像

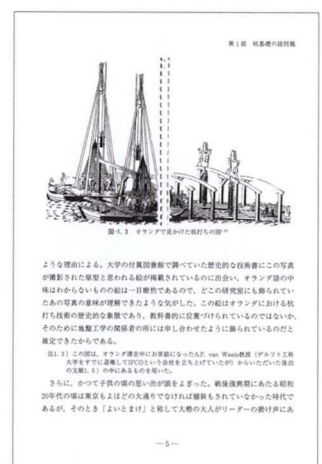


著者 馬場瑋造
発行所 南王国社
体裁 四六判、222頁
定価 本体価格1900円

「…より美しい姿、文化を生み出す人間の営みがデザインなのである。デザインを包含しない現在の建築士の資格は、建築家にとって必要条件であっても十分条件ではない」(抜粋)

書棚●2009.1

建築杭基礎雑考



著者 杉村義広
発行所 株式会社学芸出版社
体裁 A5判、274頁
定価 本体価格3000円

歴史書を調べる中で、「杭」については種々の文字が使われていることに筆者は不思議を感じ、著書をまとめるに当たって文献学、言語学の研究分野にまで入り込んだという。

総会

第2回通常総会

3月25日(水) 16:00~16:40
出席者 中井会長ほか821名
(1,546口 委任状含む)
場 所 OMMビル2階1号会議室
議 事 (1) 平成21年度事業計画(案)の件
(2) 平成21年度収支予算(案)の件
(3) 和歌山支部廃止の件
(4) 名誉正会員推薦の件

理事会

第2回通常理事会

3月25日(水) 15:00~15:35
出席者 中井会長ほか50名(委任状含む)
場 所 OMMビル2階1号会議室
議 事 (1) 平成21年度事業計画(案)の件
(2) 平成21年度収支予算(案)の件
(3) 和歌山支部廃止の件
(4) 名誉正会員推薦の件
(5) 報告事項

編集委員会

第12回編集委員会

3月11日(水) 18:00~19:00
出席者 設楽委員長ほか4名
議 事 (1) 4月号特集「楽しい福祉」の報告
(2) 5月号特集「体感するインテリア」の報告
(3) 6月号特集「空気質」の報告
(4) 7月号特集「建築と水」の報告
(5) 8月号特集「実用化レベルで展開される施工管理のIT化」(仮称)の報告
(6) 各小委員会・分科会の報告
(7) 収支状況報告

第13回法令分科会

3月25日(水) 15:00~16:30
出席者 谷本幹事ほか5名
議 事 (1) 「法令コーナー」の企画
(2) 10月号法令特集の企画
(3) 情報交換
(4) 委員の交代

第8回施工材料分科会

3月24日(火) 17:00~18:00
出席者 桜井幹事ほか4名
議 事 8月号特集企画について

第11回構造分科会

3月6日(金) 18:00~19:30
出席者 房安幹事ほか5名
議 事 (1) 委員の交代と新年度構造分科会体制
(2) 「構造の頁」の企画
(3) 構造特集
(4) 情報交換

第8回設備分科会

3月4日(水) 18:00~21:00
出席者 赤澤幹事ほか5名
議 事 (1) 見学会の企画
(2) 「設備の頁」の企画
(3) 6月号設備特集の企画

第12回作品作風小委員会

3月26日(木) 19:00~20:00
出席者 居内副委員長ほか6名
議 事 (1) 作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
(2) 「gallery」掲載報告・予定
(3) 前回の編集委員会の報告
(4) その他

第12回広告企画小委員会

3月11日(水) 17:00~18:00
出席者 設楽委員長ほか3名
議 事 (1) 4月号特集「楽しい福祉」
(2) 5月号特集「体感するインテリア」
(3) 6月号特集「空気質」
(4) いち押しアンケートの報告
(5) 広告掲載状況の報告
(6) 収支状況報告

第11回10年委員会

3月5日(木) 18:30~20:00
出席者 設楽委員長ほか7名
議 事 (1) 「建築現場」見学会
(2) 「大阪かくれたええところ」再発見コンクール
(3) 「建築と社会」誌まちづくり団体紹介

事業委員会

第7回情報見学小委員会

3月12日(木) 18:00~19:00
出席者 瀬戸川委員長ほか7名
議 事 (1) 本年度事業について
武庫川女子大学建築スタジオ見学会実施報告
(2) 来年度事業について

出版委員会

第11回出版委員会

3月19日(木) 18:00~19:00
出席者 上原委員長ほか6名
議 事 (1) プロのノウハウと特装本の経過報告

- (2) 進行中のテーマについて
(3) その他

教育委員会

工高生教育小委員会

第55回募集規定作成会
3月6日(金) 18:00~20:15
出席者 神野副委員長ほか委員5名
笹村審査委員長ほか審査員4名
議 事 (1) 第55回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討
(2) 今後の作業予定
(3) その他

「建築と社会」史料研究会

第2回「建築と社会」史料研究会

3月10日(火) 17:30~20:15
出席者 山形委員長ほか6名
議 事 (1) タイトル確認
(2) 原稿の構成等について
(3) 今後の連載企画内容検討
(4) その他

入会者(敬称略)

〔個人正会員〕

筑波 幸一郎 筑波建築設計工房

●訃報

〔名誉正会員〕

手賀 徹氏
平成20年6月逝去・享年99歳
富松 助六氏
平成20年6月逝去・享年90歳

「建築と社会」誌

特集一覧 ●1987~2008

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日

本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。取り上げてきた特集テーマは下記のと

おりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1987 vol.68	●入浴物語	●腐食	●創立70周年 記念号	●躍動する 東海へ	●貯蔵・保管 施設 ●大阪府立 体育会館	●室内の仕上床	●駅	●行政建築家 の可能性	●シティホテル の設備	●宝塚の 街づくり*	●建物と町並みの 接点 ●昭和設計 作品集	●第34回 青年技術者
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤 と基礎 ●文化と伝統—東 海からの報告	●設備における LCCと リフレッシュ ●東海建築事務所 作品集	●建物の外装 リフレッシュ*	●都心居住	●中国地方の展望 とひろしまの まちなみ	●21世紀への 照明*	●制振*	●超高層住宅 を考える	●集合住宅の リフレッシュ*	●第35回 青年技術者 ●800号記念*	●読者テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる 輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店 創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築 と伝統技術*	●省力化の ための材料 ・工法	●まちづくり と法	●博覧会と まちづくり	●都市環境創造 と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支 店建築設計作品集	●都市環境創造 と設備II ●ユーザー参加 のハウジング	●第36回 青年技術者	●最近の博覧会 パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅 のデザイン*	●ニュータウン・ ルネサンス	●東海の都市 景観 ●佐賀市文化会館*	●スケール感	●プレハブ 住宅技術の 現在と未来	●国際花と 緑の博覧会	●建築家のための 設備知識—中 規模オフィス ビルによる ケーススタディー	●高度化— 設計の多様化 をめざして*	●やわらかな 住宅管理・ ユーザーの 役割	●都市のナイス ・ブレイス ●兵庫県営繕 の歩み	●第37回 青年技術者 ●和歌山県 の展望と景観*	●高級感—建物の 顔：感性の時代 を迎えての 外装材
1991 vol.72	●新しい都市 空間づくり —I—	●オフィス・ プレジャー ●新しい都市空間 づくり—II— ●建築の風景	●東海支部 復活30周年 記念	●大阪東海上 ビルディング	●今、京都 ●建築家のための 設備知識—複合 商業ビルによる ケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設 局営繕部	●一般号*	●建築をめぐるト ラブルとその解決 ●建設現場のイメ ージアップ作戦	●空間のアイデン ティティ ●きんでん写真集 ●大建設40周年	●自治体住宅 政策への提言 ●大林組創業 100周年記念	●建築と土木 —構造技術 の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフな コンクリート ●21世紀の住まい を考える シンポジウム
1992 vol.73	●夢物語— 人にかわる、 まちにかわる—	●こだわりの インテリア ●近畿の郵政建 築15年の歩み	●建築と デザイン— 東海支部—*	●建築家のための 設備知識—集合 高層住宅の設備 システム—	●地球環境 時代の建築	●街創り、住まい 創り—住宅・都 市整備公団関西 支社10周年—	●木構造を使っ てみませんか —集成材に よる構造—*	●接着— 建築分野への 限りなき可能性	●中国地方 の町並みと建築 家の「語り、夢、 作品」*	●屋台—飯盛の 魅力に学ぶ— ハウジングの メインストリーム を探る	●いま建築教育 に何が期待 されているか	●京のかたち と色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東海建築事務所 創立60周年 記念作品集	●大阪府営繕	●東海的美術館 ・博物館	●市民劇場の 舞台設備	●環境— 限りある自然 と建築との かわり	●都市の スカイライン	●映画の中の インテリア ●けいはんなプラ ザ・佐友ホール	●建築の再生 —構造技術の 役割— ●大阪府営繕	●国際的パート ナーシップの 可能性	●福祉の まちづくり	●都市型住宅 再考	●第40回青年技術者 ●環境—人に やさしい空間創 造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の 新時代 ●広島市街創り アジア競技大会	●九州のインス タレーション と貌	●伊勢・神宮 式年遷宮と 神宮界隈*	●建築のエネ ルギーシス テム	●明日に向か って—会員 作品—	●いま、医療 施設は	●住空間にお ける居どころ への視点	●まちなかの 看板 ●竹中工務店 の集合住宅	●水と建築 ●日本建築 総合試験所	●建築設備のCG シミュレーション ●村野、森建築 事務所	●構造美— 建築の中的美 ●集合住宅団地 リニューアル	●第41回 青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる 風合の世界 *	●音—騒音から 探音/創音へ	●飛騨・美濃 —まちの活性化 と地方文化—*	●トイレから 見た都市 文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサル デザインとは	●私の空間 作法—会員 作品—	●新しい「都 市・建築」 の視点*	●建築構造と 社会の接点 ●日建設計*	●ライフライン と建築設備*	●第42回 青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災 から学ぶ *	●大阪府住宅 供給公社創立 30周年記念*	●遠江—その 地方振興と 文化—*	●立体駐車場 設備 ●大建設計	●災害！非常時に 生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プール がおもしろい	●住まいの 未来像	●マルチ メディアが つくる世界	●キーコンセプト の新时代	●最新の大规模 スポーツ競技 施設の設備	●私の空間作法* ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿道建設部
1997 vol.78	●建築のロン グライフ化 をめざして	●鉄ものがたり *	●東海支部会員作品 ●美濃—歴史・文 化とまちなみ—建築*	●創立80周年記念 ／建築と社会 —80人の眼—*	●木造建築物の伝統 技術とその将来	●住む空間の 復興—火、地震 の通と新たな展開へ ●住都公園関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市 整備公団改 革への提言	●クロスワード 都市OSAKA *	●モザイク都市 の住むかたち ●昭和設計 40周年	●私の空間 作法 —会員作品—	●第44回 青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづ くりの予感 ●東海建築事務所 創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、 そして建築	●東海支部 会員作品 ●信州—諏訪と その周辺—	●街並みの演出— 最近の外構材料	●生活環境の 安全・安心	●地球環境 保全と建築	●心と体を 元気にする インテリア	●建築設備— ビルメンテナンス の立場から	●建築への証 言—98 —21世紀に 向けて—	●ゆれをとめる —たえざる技術 からかわす 技術へ—	●私の空間作法 ●2001年の医療 施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだ JX日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ” のデザイン ●建築を模倣 する小粋なモノの仕入れ人	●大阪府都市 整備局	●東海支部 会員作品—99 北信濃—街並み と地域文化の 再構築	●都市の パブリック	●関西建築界の流 れと東海建築三 の足跡をたどる	●大阪城天守閣 平成の大改修	●改正建築基 準法—パートII—	●私の目でも みた環境問題	●アーバン インテリア—都市 空間としての インテリア	●木とともに	●私の空間作法 —会員作品—	●第46回 青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザ インの動向を見 る ●安井建築設計事 所創業75周年	●中国支部—しな なみ海と中国地方 の街づくり—	●東海支部 会員作品2000 ●豊田—山・川・地 域文化の 施設づくりの流 れ	●ここを癒す 環境デザイン	●測る—測定方法 と測定結果が 意味するもの—	●スケルトン& インフィル	●改正建築 基準法 —パートII—	●100年後への メッセージ ●日建設計創業 100周年	●来世紀に 引き継ぐ べきもの、 このころ—	●時間	●私の空間作法 —会員作品— ●21世紀の高 齢者の居住環境	●第47回 青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ ・ティファシリ ティーズ	●21世紀の建 築設計教育	●東海支部 会員作品 ●岐阜・大垣	●I T社会に おけるきず な	●自然素材をめ ぐる「もの ・わざ・ひと」	●成熟社会を ささえる まちづくり	●現代の日本 の空間・文 化を探る	●環境—近未来に 向けて— ●大建設—作品集 1996—2001—	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整 備公団関西 支社	●私の空間作法 —会員作品— ●NHK大阪放送 ・大阪府立博物館*	●第48回 青年技術者 ●大阪府立博物館*
2002 vol.83	●国土交通省 近畿地方整備 局営繕部*	●再生・リサ イクル	●東海支部 会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安 全・安心 —パート2—	●塗装の いろいろ	●都市再生に向 ける建築基準 法規定のあり 方	●いま、インテ リアデザインは ●漆 リノベーション	●建築をささ えるセンサー	●建築とボラ ンティア	●時を超えて— サステナブル エンジニアリ ングの現在—	●私の空間作法 —会員作品— ●大阪府中央 公会堂	●第49回 青年技術者 ●大阪府中央 公会堂
2003 vol.84	●東海建築事務所 創立70周年	●九州の地域づ くり・まちづ くり	●東海支部 会員作品2003 ●愛知・名古屋—こ の文化・芸術と建 築—暮らしのデザ イン—	●サスティナ ビリティ—次世代 に引き継ぐ都市・建 築—暮らしのデザ イン—	●建築と五感	●都市計画法及 び建築基準法 等の改正	●コンパジョ ン—インテリア から発信す るまちなみ—	●介護と建築・ 設備	●建築とノスタ ルジ—建築の主 観的価値につ いて—	●力と素早くつ き合う方法	●私の空間作法 —会員作品—	●第50回青年 技術者—十 年技術者顕 彰50年
2004 vol.85	●大阪府住宅局	●都市緑化	●東海支部 会員作品 ●愛・地球博 *	●省リスクな 「まち再生」 *	●リニューア ルの技	●地域住民主体 のまちづくり と支援制度	●Product Design+1	●銭湯—心地 よさを求め て—	●建築家とは 何か	●巨大地震に そなえて	●私の空間作法 —会員作品—	●第51回 青年技術者
2005 vol.86	●震災から 10年	●「健やか」 ●長崎医療 センター	●東海支部 会員作品2005 ●東海における施設 づくりへの新たな試 み	●建築の経済 化	●住まいの方 の変化	●人工栽培	●次世代に伝 える「木」の建 築 「建築と社会」 1000号記念	●改正建築基 準法と景観 緑三法	●火災から 守る	●構造の過去 から未来へ *	●私の空間作法 —会員作品—	●第52回 青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デ ザインに参 加のまちづ くり	●「地方空港の 時代」—まち と共存する空 港づくり—	●東海支部会 員作品2006 ●十東海支部 特集3部作*	●都市再生の 本質—光と 影のはざま で—	●変容する家 族形態とあ たらしいライ フスタイル	●身近な省エネ ギ—エネルギー をたくわえ、有 効利用する—	●設計図が伝 えるもの	●建築物の安 全・安心 *	●第53回 青年技術者	●「セキュリ ティ」	●もしも… —構造が未 来へつなぐ 夢—	●私の空間作法 —会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く 京都の景観 まちづくり	●学校新時代	●東海支部会 員作品2007 ●十東海支部 特集3部作	●創立90周年 記念—この 10年、これ からの10年	●あそび考	●こだわりの 創る住まい のカタチ	●住まいの設 備と空間の 移り変わり	●建築系雑誌 が伝えるも の	●建築基準法 等大改正	●第54回 青年技術者	●ガラスを 考える	●楽しい構造 の世界
2008 vol.89	●私の空間作法 —会員作品—	●PFI事業、 その後	●東海支部会 員作品2008 ●十東海支部 特集3部作	●まちづくり 2011年宣言	●新ホテル物 語	●設備に役立 つ地震対策	●中国地方を訪 ねて見ると ●小林聖心女 子学院	●建築と景観	●第55回 青年技術者	●木造住宅を 巡って	●建築において ROBOTが 活躍する日は 来るのか？	●自然と戦う 構造

*は欠号

空調・衛生・クリーンルーム設備
(設計・施工)



本社・本店 東京都港区浜松町1-25-7 電話03(3432)5711
大阪支社 大阪市淀川区加島1-58-59 電話06(6302)2270
支店 北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設計 施工



本店・大阪本社 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号 電話(06)6441-8231
東京本社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2丁目15番10号 電話(03)3261-8231
支店 名古屋・福岡
支店 札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・
広島・高松・熊本
営業所 帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・
福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所 旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店 シンガポール・ホンコン
技術研究所 〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地 電話(0492)58-1511



We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、
雑誌、文庫、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング、コンサルティング、ITソリューション、
web及びメディアコンテンツ企画制作



株式会社NPGコーポレーション
本社 〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel: (06) 6351-7271 (代) fax: (06) 6352-7479
第二ビル 〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel: (06) 6351-0128 (代) fax: (06) 6351-0208
東京支社 〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1
一光浜松町ビル7F
tel: (03) 3433-5211 (代) fax: (03) 5776-7733
(旧社名ナニワ印刷株、日本データネット株)

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLビル
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA (膨張性混和材)

●デンカタスコン (グラウト用無収縮材)

●デンカキューデックス (止水・補修用急硬セメント)

●デンカES (土質安定用急硬材)

●デンカΣ1000 (製品用超高度混和材)

コンクリートのひびわれ防止に

鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに

コンクリート躯体の漏水補修に

地盤補強用薬注入

コンクリートパイルの早期出荷と
ハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社

近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社

TEL 大阪 (06) 6332-6861
TEL 東京 (03) 3272-8501

小浦産業株式会社

TEL 大阪 (06) 6443-6181

浜宗産業株式会社

TEL 本社・京都・京丹後 (0772) 72-2220
舞鶴 (0773) 76-0133

住宅エクステリアの 100ポイント

技術者必携!

A5判・232頁

定価2625円 (本体2500円)

計画・設計・施工・メンテナンス

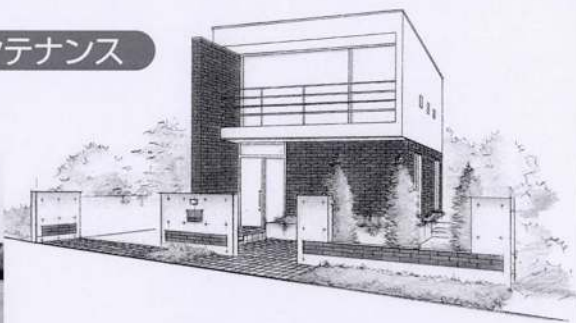
藤山 宏 著

企画・日本建築協会

Hiroshi FUJIYAMA

contents

- 第1章 エクステリア計画前の予備知識
- 第2章 エクステリア計画の全体概要
- 第3章 エクステリア計画に必要な法的知識
- 第4章 ゾーニングからプラン作成
- 第5章 門廻りの設計
- 第6章 階段・アプローチの設計
- 第7章 塀・外柵・擁壁(土留)の設計
- 第8章 カースペース・ヤードスペースの設計
- 第9章 エクステリア計画における効果的な
緑(植栽)の設計施工
- 第10章 施工
- 第11章 メンテナンス



成長するエクステリア業界の
技術者に求められる広範な知識・考え方を
体系的に整理した初めての書

学芸出版社 〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811 fax 075-343-0810
<http://www.gakugei-pub.jp/> E-mail info@gakugei-pub.jp

国際品質規格ISO9002
認証取得工場



REGISTERED ORGANIZATION

QMS Accreditation

R002

登録番号 0136 0138

高強度・太径ネジテツコンの開発を通して
新しい社会空間の創造に貢献



ネジテツコン無機グラウト継手
エースジョイント

東京鉄鋼株式会社

TTK

<http://www.tokyotekko.co.jp>

東京本社: 〒162-0824

東京都新宿区揚場町1番21号 飯田橋升本ビル5階

TEL: 03 (5228) 9011 FAX: 03 (5228) 9021